雨ノ月 ～アマヤドリ～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨ノ月　～アマヤドリ～

【Ｎコード】

Ｎ１６８９Ｄ

【作者名】

雨月

【あらすじ】

変わった世界での普通の話。百聞はなんとか！

A：ある日の境

彼のプロローグ　～Ｗｈｏ　ｉｓ　ｔｈｉｓ？～

一人の男性がいつものように畑仕事に行くと、職場でもある畑にとても珍しい野菜がなっていたのだった。季節は秋で天候は雨の日だった。本当だったら大根が出来るはずだった場所に二本の足が突き出されていたのだった。

男性はそれを見ると両足を掴んで引っ張ってやったのだった。引き抜くとそこには全裸の男の子が仰天のまなざしで男を見ていたのだった。そして、次に股間を押さえた。男性は後に

「ええ、初めは新種の大根か？と思いましたよ。え、いえいえ、股の間のものじゃなくて、足のほうです（笑）」と語っている。

彼が収穫したのは畑から生まれた男の子だった。

世界のプロローグ　～Ｉ　ａｍ　ｇｏｄ．～

その世界では人は神に作られたものだといわれていた。だから、生み出すことを製造するという意味で話す。

ある日、一人の男性が神を作ろうとして一つのものを製造した。それを見ていた一人の女性が悪魔を生み出した。

別に神話や言い伝えなどで出てくるような邪悪なものではない。誰が言い始めたのか知らないが、彼女が生み出したものを悪魔と呼んだからだ。

悪魔はちょっとひねくれものがおおかったりもした。

そして、悪魔を製造したその場所に居合わせていた別の女性が天使を製造したのだった。

悪魔がいるのなら天使がいてもおかしくはないだろうということで天使と名づけられたのだった。

その後、天使と悪魔は人間に製造され続け・・・・この世界には人間、悪魔、天使という三種族が生まれた。初めに製造された神は悪

魔や天使が増え続けると良くないと思い、この世界にルールを造った。その世界では人が生み出すものを悪魔一、天使一という割合としたのだった。そして、そのルールは破られることはなかった。神は「食費がかさむため」と述べている。その後・・・神は自ら姿を消したのだった。

神の存在が忘れられてある程度時が経ったある日・・・・世界が誰かにのっとられた。誰かはわからない。

一、〜ｂａｄ　ｄａｙ〜

一人の男の子が駅のプラットホームで頭を抱えていた。

「しまったぁ！転校初日から遅刻確定だよ！どうしよ！」

男の子・・・・見た目は十七歳程度の人間で、髪は深く黒くかすかに青い。髪に隠れているが時折見える左眉の辺りに引っかき傷が印象に残る。その瞳は先ほどからずっと腕時計に注がれていた。

「一時間も遅刻しているし・・・・すべては誰が悪いんだろう？」

待望の一人暮らし・・・彼は夕べからの一匹狼ライフを堪能していた・・・・というのは冗談で、コンビニの弁当を食べた後、風呂に入って洗濯をしようとしたのだが機械にどことなく疎い彼は洗濯機を動かすのにも少々時間を労し、説明書を見ながらいじっていて気がついたら深夜になっていたというわけである。おまけに目覚ましは六時にセットしていたのに午前五時に電池が昇天してしまったようで針が止まっていたのだった。ろくなことが続かないなぁと思っていたら今度は道を間違えて彼の目の前で電車のドアが彼を阻むように閉まったのだった。

「既に他の人もいないし・・・・」

寂れたホームには誰もおらず、彼だけが立っていたのだった。おまけに雨まで降ってきたようだった。

だが、一人だけだと思っていたらどうやら彼以外に人がいたらしい。

「や、やめてくださいっ！」

「いいじゃないかよ～」
「遊びにいこうぜぇ～？」
「触らないで！」
声がしたほうを見ると一人の女子高生・・・いや、見た目は女子中学生が男たちに絡まれているようだった。
彼は意を決して女子中学生を助けに向かったのだった。
「・・・あの～すいません」
「あん？何か用かよ？」
がんつけられて彼は足がすくんでいたのだった。女子中学生は少しだけほっとしたような顔をしたのだが・・・
「・・・傘をお持ちじゃないでしょうか？その、僕・・・傘を忘れちゃって・・・絶対に返しますから貸していただけません？」
「ちっ、そのぐらいで話しかけてきたのかよ・・・このビニール傘、やるからあっちいってな！警察にちくるんじゃねぇぞ？」
彼にビニール傘が投げられ・・・彼はそれを掴んであっという間に逃げ去ったのだった。だが、何かを忘れたのかあわてて戻ってくると再び期待の色を映した女の子のほうをみた。女の子に
「いやぁ、ごめんね・・・僕、腕っ節はからっきしなんだ。ああ、それと、雨が降るから、気をつけてね？」そう告げて彼は再び去っていったのだった。女の子はそれを聞いて絶望の色を瞳に映した。
次の瞬間、彼女を囲んでいた二人の男が見事に上空に舞った。目の前でいきなり男二人が雨避けの屋根を突き破って飛んでいったのだ。勿論、誰でも驚くだろう。勢いあまって破壊されたのか・・・・女の子が立っていた場所の上の屋根も壊れており、女の子は雨に濡れ始めたのだが、そんなことを気にせずに上空に飛んでいった二人組を見る。二人は降りてきて
「ぐへっ！」と二重発声して気を失ったようだ。気を失った片方の手が不自然に曲がってしまっているからどうやら、折れてしまったようだが・・・この場合は自業自得だろう。
濡れている女の子のところへ彼がやってくる。その手には倒れて

いる男から彼が借りた傘とは違う折り畳み傘が握られていたのだった。
「濡れますよ。傘、持ってなかったら僕のを貸しますけど？」
「え、あ・・・・」
何が起こったのかぜんぜんわからない女の子だったが・・・彼の後ろから気を失っていたはずの片方が起き上がって彼に襲い掛かろうとしていたのだが・・・
「ぐふぁ！」
という奇声を上げて再び空に飛んでいったのだった。信じられないものを見ながら女の子は半ば渡された傘を掴んだのだった。
そんな二人のところへ電車がやってきた。どうやら女の子が待っていた電車のようで・・・女の子は驚いた顔を維持したまま、それに乗り込んだのだった。彼はその光景を見て
「ああ、僕って今とても輝いてるよね！？いやぁ、人助けをするのってものすごく楽しいなぁ・・・・しかも、かっこいい台詞も言えたぜ！」という顔をしていたのだった。

女の子が去った後、彼は重大なことに気がついたのだった。
「のわっ！僕ってあの電車に乗らないといけないんじゃないか！？」
いまさらながらに気がついて自分がどれだけ愚かなことをしていたかを悟った。ビニール傘をきちんと返却し、彼はあわてて走り出す。向かう場所はいまどき古い公衆電話だった。
そこで番号を押し、相手が出るのを待つ。
「・・・・あ、すいません！」
電話の相手はいきなり謝られたので驚いているようだった。
「あ、すいません！ええっと、輝輝高校ですよね？今日二年三組に転校してくる予定の五月雨時雨（むらさめしぐれ）ですが体調がすぐれないので・・・・・ええ、ばあちゃんの忌引きなんで休みます。いえ、あ、その・・・・機嫌が悪いので休みます・・・・あ、違うんです！さぼりじゃなくて・・・ふざけているわけでもないんです。実は僕、ちょっと道に

迷っちゃって・・・迷子？迷子じゃありません！僕、もう子どもじゃないんですよ！」
　何がしたいのかわかない時雨だったのだが、電話の対応をしてくれた相手がどうやら温厚な先生だったことが幸いだったようだ。相手は
「ああ、確かに地形とかが入り組んでいるからねぇ」といって特別に迎えの車を用意してくれるとのことだった。駅にはそろそろ人だかりが出来ているようで・・・時雨は駅から出て雨宿りをしながら車が来るのを待ったのだった。
「輝輝高校か・・・・」
　一人、雨の中呟きながら・・・・

　女の子は学校について自分の担任の先生の元に行って朝あったことを告げたのだった。
「よぉぉぉっし！わかった！先生が今から行ってそいつらをぼこぼこにしてやろう！」
「あの、そんなことしなくて・・・いえ、する必要がないと思いますんで、警察を・・・」
「わかったぁぁ！」
　やたら熱血な先生が頷いて放送室に侵入。彼は
「え～開校依頼の緊急事態が起きましたので、先生方は授業を即刻やめて今すぐ、職員室に集まってください！」と音量最大で述べたのだった。放送が終わってもなお、きーんとした音が女の子の耳に残っていた。
「じゃ、お前は教室に行ってろ。遅刻にはしないから気にするな・・・・ああ、ついでにクラスの連中にはこのことは黙っておけ・・・・自習は静かにしていろよ？」
　先生だったら
「大丈夫だったのか？」とか聞くのは当然なのだろうが、先生はそんなことを気にしていなかった。いや、この性格ではそこまでいか

ないのかもしれない。
　先生に頭を下げて職員室を出ようとしたところで保健室の先生が廊下を走っていったのだった。
「先生、どこか行くんですか？」
「ええ、そうよ？」
「あの、今の放送聞いてましたか？」
「ああ、あれね・・・・私には関係ない・・」
　そういった保健室の先生に
「もっと生徒を大事にして欲しい！」と思ってむっとした女の子だったのだが、
「というより、転校生が一人迷子になっててねぇ・・・しかも、迷子になった自分を認めたくないようで錯乱しているようなのよ・・・」
　なるほど、現在進行形で錯乱している転校生のほうが大変だろう。誤って何かしらの事件を起こしかねない。
「そういうわけで、私は急いでいかなくてはいけないのよ・・・・ああ、そういえばあなたたしか二年三組だったわよね？ついでに机と椅子をクラスに持っていってくれないかしら？」
「え、私たちのクラスにですか？そんなこと、聞いたことないんですけど・・・・」
　初めて聞いた事実に女の子はきょとんとしたのだった。
「まぁ、あなたたちの担任はおつむがちょっと足りないからねぇ・・・きっと忘れていたのよ」
　女の子のクラスの担任の性格は学校の細部まで行き届いており・・・この高校の人に言わせれば
「この地球上に存在するとは思えない身体能力だがいかんせん、頭は尺取虫に劣る」とのことである。
　先生と別れ、女の子は用務員さんから机一式を渡してもらってそれをもって自分の教室にようやくついたのだった。女の子はここまで時間がかかるとは思っていなかった。

「あれ？その机どうしたの？」
級友の一人が尋ねてきたので女の子は
「転校生が来るらしい」との言葉を皆に伝えたのだった。
それを聞いたクラスメートたちは初めは小さい会話だったのだが・・・・だんだんと騒ぎ始めたのだった。それを止める先生も学級委員も今、この教室にいないのでものすごい騒ぎとなってしまった。
勝手に話が進んでしまっており
「俺と美少女の運命なる出会いの始まりだ！」
「いやいや、俺様との恋の話さ！」などと男子は騒いでいる。そう騒いでいる男子たちを無視する形で女の子は一番後ろの席・・・窓際に机を置いたのだった。男子たちには残念ながらそこは女子に囲まれている席だった。これでは
「隣の彼女に優しく接する男子」という作戦ができない！と叫んでいる男子もいた。
ようやく席につくことが出来た女の子・・・・レミルシェル・フェルボートはため息をついたのだった。
「どうしたの？元気ないね？」
「まぁね・・・ちょっと信じられないことが立て続けに起こっちゃって・・・・」
未だに夢見心地のレミルシェルだったが・・・・あれは事実なのだろう。先生はしゃべらないほうがいいと思ったのだが彼女は自分が見たことを友達に教えたのだった。
「へぇ、それでレミルはその男の子が自分を助けてくれたって思ってるんだ？」
「う～ん、でもさぁ・・・信じられないんだよ・・・」
「でも、信じてるんでしょ？」
「まぁね。この置き傘を渡してくれたのもその男のだし・・・男の子のことは言ってないんでしょ？」
首をかしげているレミルに女の子がさらに話しかけようとして・・・

「はい、ちゅうもーく！」
がらりと扉を開けて白衣の女性が入ってきた。保健室の先生の突然の登場に皆驚いていたのだった。
「このクラスが一番さわがしーぞ！また、クラス全員で熱血のエンドレス・マラソンをしたいのかぁ？」
一同お通夜のように静かになったのを確認して教室の外に呼びかけたのだった。
「さぁ、転校生の五月雨時雨君、はいってきなさい」
「は、はぁ・・・」
申し訳なさそうに言いながらずぶぬれとなってはいってきたひとりの男子生徒に見覚えの会ったレミルは静かになっていた教室の中で一人だけ
「あっ！」と叫んでしまったのだった。不思議に思ったのか、クラスメート全員が彼女を見たのだった。
そして、相手もレミルに気がついたのか世界が滅亡しますということを告げられたような人の顔になっていたのだった。
二年三組に新たに加わった転校生、五月雨時雨はレミルのほうを数分見ていると突然倒れ、その後、生まれてはじめて保健室に運ばれたのだった。

A：夢の続き

誰かのプロローグ　～Ｍｙ　ｂｒｏｔｈｅｒ．～

誰かが小さい頃・・・・その誰かは泣き虫だった。周りの子どもたちからはいじめられていたが、誰かにとっては兄が優しくしてくれればそれでよかった。ある日、友達を作りたいと兄に告げると誰かの兄は

「大丈夫、あきらめなければなんでもできるよ」といったのだった。しかし、予想に反して誰かはその日もいじめられた。泣いている誰かの元へ、兄はやってきていじめっ子たちを説得するも失敗。兄は単身、いじめっこグループと血みどろの戦いとなった。兄は誰かが既に帰っていたと思っていつもは絶対に見せないような表情を見せていじめっ子グループを解散にまで追い込んだのだった。怖くて隠れていた誰かだったのだが・・・・物音を立てて兄に見つかってしまった。自分ももしかしたらいじめっ子グループみたいになるかもしれないと思いながら震えていると苦笑いをしながら兄は近づいて誰かの頭を撫でたのだった。彼は困ったように

「見られちゃったか・・・・まぁ、困るってことでもないけどね・・・いや、困るかぁ・・・ま、誰にもしゃべんないでね？」と誰かに告げた。誰かは

「あきらめなかったけど、駄目だった」と兄に告げた。兄は

「駄目ってことじゃないさ。どうしても駄目だって時に僕はいるんだ。だから、失敗しても僕がいつでも助けに入る。失敗なんて気にしないでいいよ」と言って去ったのだった。その後、誰かは成長して兄のようになりたいと思ったのだった。

二、～Ｉ　ｆｅｅｌ　ｌｉｋｅ　ｔａｋｉｎｇ　ａ　ｒｅｓｔ．～

時雨は保健室のベッドに寝ていた。

「五月雨君？」

「・・・・・」
「五月雨君、起きてるなら返事をしなさい」
「・・・・・」
「じゃ、この液体を投与してもいいのね？」
「はい、僕は起きてます！」
ものすごい勢いで起き上がって時雨は保健室の先生を見たのだった。
「よくもまぁ、倒れた振りして保健室まで逃げてきたわねぇ・・・」
「いえ、まさか保健室の先生にばれるとは思いませんでしたよ」
先ほど、教室で倒れたのは演技だった。
「何で倒れたの？」
「その前に教えて欲しいことが一つ・・・なんで嘘だとわかったんですか？」
「あのねぇ、パニックになっている生徒と違って私は場数を踏んでるの・・・・顔色がとってもいい奴が倒れて体温も脈も正常な生徒が・・・書類、見たけど持病の欄は白紙だったわよ？・・・倒れるのは不自然。前にもそんな奴がいたからねぇ～」
保健室の先生はなかなか侮れない・・・と時雨は思いながらベッドに座ったのだった。
「で、何で倒れたの？」
「いやぁ、少々厄介なことがありまして・・・」
「厄介なことって何？」
先生は立ち上がってコーヒーを作り始めた。
「そ、それは・・・まぁ、ちょっと・・・実は、さっき叫んだ女の子がいたでしょう？」
「ええ、いたわね？それが？」
コーヒーを手渡されたのでそれをちょっとだけ飲んで続きをしゃべり始める。
「それが問題大有りなんですよ・・・僕、ちょっと変わった体質してて・・・今朝、あの子を助けたんです」

「助けたならなんで騒ぐ必要があるの？いいことじゃない？」
「いや、そのとき普段の自分とは違うような口調でこっぱずかしいことまでいったんですよ・・・・てっきり女子中学生だと思ってましたから、もう会うことはないだろうと思っていたんです」
ああ、これからどうしようという顔をしながら時雨はコーヒーを飲み干した。そんな悩める高校生を見ながら保健室の先生は一つ提案した。
「それならあくまでも初対面だと言い切ればいいんじゃない？」
「え・・・そんなの、無理ですよ。顔だって見られてますし・・・・」
「大丈夫大丈夫。さっきの演技は私から見たら大根役者だったけど・・・女の子一人ぐらい騙せるでしょ？あっちがそのことについて触れてきてもはぐらかせばいいのよ」
「だ、大丈夫ですかね？」
不安そうに尋ねてくる時雨に保健室の先生は頷いた。
「勿論よ。可能ならば私も協力するわ」
そういってくれた保健室の主に時雨は頭を下げたのだった。
「ありがとうございます！ええっと、すいません、名前は？」
「白波優奈（しらなみゆな）よ。生徒の悩みを聞くのも先生の勤めだからきにしないで・・・・ああ、そろそろ戻ったほうがいいと思うから・・・」
「はい、失礼します！」
時雨はそういって保健室を後にしたのだった。

時雨がいなくなった保健室では優奈が独り言を呟いていたのだった。その手には保健室に置かれているテレビのリモコンが握られていた。そして、めったに動くことがないテレビには時雨とレミル・・・・レミルに絡んできた二人組の姿が映し出されている。
「なるほど、こりゃとってもいい宝石を見つけたわ・・・きっと日ごろの行いがいい私への神様からのプレゼントかしらねぇ？」
不適に笑う優奈は生徒から評判のよい先生とは違う顔をしていた

のだった。
教室に戻ってきた時雨に先ほどようやく知り合ったクラスメートたちが心配そうな表情を見せていた。身を案じるような表情を見せるものから話しかけてくるものまで・・・そういうことが苦手な部類の時雨は
「ああ」とか
「うん」とかいいながら自分の新たな席を探したのだった。
「ええっと、ごめん、誰か僕の席知らない？」
「ああ、五月雨君の席はあそこだよ？」
指差したところにはレミルが座っている席の右側の席だった。時雨としてはさっきまであの机には別の女子が座っていたような気がしたのだった。
「ありがとう・・・」
教えてくれた相手に礼を述べて時雨は席についたのだった。クラスメートが彼に話しかけようとしてくる前に今度は熱血先生がやってきたのだった。
「すまん！転校生の五月雨はもう来たそうだな？」
「はい」
「おお、なかなかよい面をしているではないか！存分に学校ライフを楽しんで欲しいところだが・・・ご家族からの電話だ。何でも、緊急事態で一応帰る準備をして職員室に来てくれ！他のものは自習だ！」
面食らっている時雨・・・そりゃそうだ。倒れて戻ってきて、またいなくなるとは誰も想像してはいまい・・・・・。
複雑な心境の時雨にこれまた複雑な心境のクラスメートたちは手を振って時雨もそれに答えたのだった。最後にレミルと目があったような気がしたのだが、相手から目を伏せたので時雨は何も言わなかった。

時雨のいなくなった教室では今のところ謎の多い転校生についての自己分析が語られており、一人上の空のレミルの下へ元、彼女の隣の席だった女の子が話しかける。
「嵐のような転校生だったね？」
「・・・そうね・・・」
「レミルから聞いた感じの王子様って感じじゃないけどなぁ・・・」
「のほほーんとしたような性格だったし・・・」
そんな話が行われていたのだった。

時雨は電話を取ると驚いた。
「ええっ！？それって本当！？」
『そ、そう、本当・・・おにいちゃん、聞いてないの？』
相手は時雨の妹の五月雨春乃（さみだれはるの）だった。
「う、うん・・・母さんと父さんが書きおきのこして外国に行くなんてぜんぜん聞いてないけど？ほら、僕もここ最近忙しかったから・・・引越しの準備とかでさ」
一歳年下の妹に事実を告げる。
「それで、書置きにはなんて残ってたの？」
そう告げた時雨だったのだが、妹の返事がない。
「春乃？」
『え、ああ・・・ええっとねぇ・・・・』
なにやら気が動転している妹に
「まぁ、普通は驚くだろうなぁ・・・両親が目を覚ましたら書置きを残していなくなっているんだからなぁ・・・」と心の中で同情している時雨だったのだが、本当はちがうところで妹は緊張していたのである。
『えっとね、行き先は書いてないし、いつ帰ってくるってのもわかんないんだけど・・・お兄ちゃんが借りたアパートに一緒に住みなさいって・・・そ、その・・・か、書いてるよ？え、えっと・・・私がいっても迷惑じゃないよね？』

なるほど、そう来たかと時雨は思ったのだった。幼い頃からずっと一緒に妹がいたので時雨は
「これでは妹が自立できない！」という理由を含めた今回の引越しは困ったことに失敗してしまったようだ。だが、それも事実だろう・・・・妹は料理が下手な挙句に一人という状況が大嫌いなのである。親戚の家に行こうにも飛行機に乗らねば遠いに違いない。
「・・・わかった、それならしょうがないね・・・・家、わかる？」
『うん！大丈夫・・・といいたいけど、既に迷子になってる・・・』
今にも泣きそうな声が聞こえてきて
「どうしよ、お兄ちゃん！」との言葉も聞こえたのだった。
「わかった、僕もちょうど帰る準備をしていたから今からそっちにいくよ。悪いけど、今自分がどこにいるかわかるかな？」
『えっと、近くに輝輝高校があるよ』
「・・・・」
これもきっと両親の仕組んだことなのだろう。あの両親は裏で動くことが大好きらしく、母、父ともども農家ながら怪しい客をよく家に連れ込んでいたことを時雨は覚えているのであった。
「それなら場所は・・・校門の前のレストランで落ち合おう」
途中聞こえてきたウェイトレスと思われる人の
「御注文はお決まりでしょうか？」という声に時雨はそう告げたのだった。どうやら、相手は既に待ち合わせ場所にいるらしい。
『う、うん・・・おにいちゃんは何頼む？コーヒー？』
「いや、コーヒーはいいよ・・・もう、飲んだからね・・・」
適当に何か頼んでおいてと告げて時雨は立ち上がって職員室で会議を行っている先生たちに頭を下げて職員室を出たのだった。
下足箱へと向かう途中、保健室の先生に時雨はあった。
「あら？もうお帰り？」
「ええっと・・・緊急事態なんですよ、白波先生・・・」
「優奈でいいわ。それで、何が起こったの？」
「・・ちょっと両親が旅に出ちゃったみたいで・・・しかも、滞在

期間と不明なんです。パスポートとか持ってないっていってた気がするんですけどねぇ・・・・いつも金がないって言ってるし・・・」
「どっちとも手作りでいったんじゃない？」
少々話をして時雨は優奈に別れを告げたのだった。

「なるほど、やっぱりあの二人の息子か・・・・こりゃ、本当にいい宝石を手にいれちゃったわ♪」
非常にうれしそうに笑っている優奈はそのまま職員室へと向かったのだった。

傘を既に所持していない時雨は鞄を上に掲げて走り、学校を抜け出したのだった。こんな時間帯からファミレスへと向かう高校生を見かけたらウェイトレスさんたちはなんと思うだろうか？
「・・・いらっしゃいませ、お一人様ですか？」
「ええと、連れが・・・」
片眉をちょっとだけひそめたウェイトレスだったのだが、マニュアルどおりの言葉を時雨にたずねてきたのだった。
「お兄ちゃん！こっちこっち！」
そろそろ恥らう年頃なのになぁ・・・と時雨は思いながら春乃の元へとやってきたのだった。彼女の前にはイチゴパフェが二つおかれていたのだった。花火まで無駄に載っている。とても高級そうなイチゴパフェだった。
「・・・・はぁ、貴重な食費が・・・」
「おいしいよ、お兄ちゃん」
とりあえず座ってパフェに手をつける。
「・・・・春乃、書置きは持ってきたのか？」
「ええと、これだよ？」
手渡された書置きを見ると、なるほど
「外国に行ってきます。春乃は時雨ちゃんの借りたアパートに住まわせてもらいなさい。月に一回ほど連絡を入れます。ちなみに今月

は今日連絡する予定です。5回コール音がなってもそちらがとらない場合はまた来月を待っていてください」とだけ書かれていたのだった。
「え、まじ？何、このやる気ない内容は？」
「私携帯来月かってもらう予定だったのに・・・どうしよう？」
「とりあえず、僕の携帯にかけてくるってことかなぁ？」
そういって時雨は自分の携帯を取り出したのだった。
「ええっと・・・着信あり？非通知設定・・・これ、間違いなく母さんたちだよね？」
連絡手段を失った時雨はがっくりと頭を垂れたのだった。

A：ある日の夢の終わり

女の子のプロローグ　～Ｈｅ　ｐｉｃｋｅｄ　ｉｔ　ｕｐ．～

女の子の家の隣に住む男の子は弱かった。

女の子が叩けば泣くわけではないが、とても困った顔をしていた。それが楽しくて女の子は男の子をよく叩いていたのだった。他人が女の子を叩けばその男の子が後で女の子の報復を行っていたりするのだが女の子はそれを知らなかった。ある日、隣の家に濡れた布団が干されていたので女の子は小学校でそれを皆に言いふらした。男の子はからかわれ、

「やーい、ねしょんべんおとこ！」とののしられていたのだった。

男の子は女の子に助けを求めようとはしなかったのだが、それ以後、女の子を避けるようになった。女の子が話しかけてもあいまいな返事をしたり、気がついているのにあからさまに避けたりもした。女の子は強情な性格だったのだが、自分が今まで彼にどんな仕打ちをしてきたのかようやく知り、以前、女の子をいじめた男子からは男の子が女の子を助けたという話も聞いたのだった。

だから、女の子は担任から男の子が

「転校した」という事実を聞いて驚いたのだった。嘘だと信じたくて女の子は携帯に電話をしたのだが決して繋がることは無かった。

三、～Ｔｈｉｎｋ　ｏｎｌｙ　ｔｈｅｍｓｅｌｖｅｓ．～

「お兄ちゃん、今日の晩御飯は何？」

「今日？残念ながら今日の晩御飯はうま○棒だよ。春乃にはあんちゃんが好きなサラダ味を譲ってあげよう」

「え～そんな晩御飯いやだよ！大体、お兄ちゃんこの前『サラダ味なんて嫌いじゃあ！滅亡してしまえばいいんだよ！』って叫んでなかった？」

「残念ながら、覚えてないなぁ・・・・」

「ほら、おとといだよ・・・」
「知らない。春乃、僕は晩御飯の材料を買ってくるから春乃は戸締りをして六時から始まるアニメを録画しておいてね」
　こうして、兄は晩御飯を作るために必要な材料を買いにいくことになったのだった。
基本的には胃の中に何かを入れておけばいいと思っている時雨は本当にうま○棒を主食氏にしかねないような男である。一人生活をしているといずれ、ビタミンなどが欠乏して栄養失調で死んでしまうかもしれないような男なので彼の母親は監視役として春乃を彼のアパートに入れることを決意したのだった。

「あ～今日は何を作ろうかなぁ？」
　夕食時の時間帯・・・・普段だったら学生さんは未だに学校にいるような時間なのだが、本日転校してきた五月雨時雨は早退をして妹とパフェを食べた後にアパートへといってから晩御飯を作るために材料を買うことになったのだった。
「・・・・春乃の好物ってなんだっけ？」
　成り行き上（実は彼の栄養面上）とはいえ妹がやってきてしまったので好物を振舞ってあげるのも悪くは無いだろうと時雨は思っていたのだが・・・・財布の中身を確認してうめいた。
「いや、別にいいか・・・・目玉焼きと・・・ゆでたブロッコリーでも充分なんだけど・・・ああ、プリンをかってこようかな？久しぶりに食べても大丈夫だろうし・・・」
　妹の好物を考えるようないおにいちゃんはどこかに去っていき、代わりに出てきたのは自分の好物を考えているようなおにいちゃんだった。幼少の頃にこのような態度を兄貴が取っていると下のものは兄貴になついてくれないのである。
「オムレツと・・・ゆでたブロッコリーでいいだろうなぁ・・・」
　手抜き料理はさすがに妹がいい顔をしないだろうと思って時雨は再び歩き始めたのだった。

まだおばちゃんたちの人工密集度が低い商店街にやってきた時雨だったのだが・・・・・・

「ん？」

視界の隅にどこかで見たような人影を見つけたのだった。別に隠れる必要も無いのに彼は電柱に隠れたのだった。

「あれは・・・・律火ちゃんか・・・・」

彼が視線を送る先には白い紙を持ってなにやらきょろきょろとしている律火・・・本名、炎道律火（えんどうりつか）がいたのだった。

「何だってこんなところに？」

トラブルメーカーでわがまま、傲慢、自己中心という似たり寄ったりのオンパレードな性格の彼女のことを時雨はよく知っている・・・・というより、幼馴染であった。

小さい頃から散々苛め抜かれ快楽に変わってしまうような危ない趣味を持つ前に時雨はいやになった。

彼が引越しした理由の一つにも入っている。

小さい頃は大きくなれば可愛くなるだろうと思った時雨だったのだが・・・・いや、確かに彼の予想は外見上はとても当たっているのだが内部は彼のよそうに大きく反して傲慢ちきちきの私は偉いお姫様！おほほほ・・・みたいな感じになってしまったので彼としては非常に苦手としているような部類に入る。彼女の評判のおかげで金魚の糞と思われている時雨は一度もラブレターをもらっていない・・・・実際のところはもらっているのだが時雨がそれに気がつく前に律火がすべて燃やし、差出人を脅迫・・・・ということで彼としては律火とかかわりをもう持ちたくないのである。

「なんでこんなところにいるんだよ！僕には気がつきませんように！僕には気がつきませんように！」

彼女がツンデレだったらまだよかったのになぁ・・・彼女の場合はツンツンだ！とがった部分しか僕には見えないと時雨は思いながら律火が通り過ぎるのを待っていたのだが・・・律火の進路方向に不良グループが現れたのだった。このままいけば間違いなく、律火

が何かやらかして不良グループに囲まれて結局は時雨が出なくてはいけない場面になるだろう。
「だが、そんなツンデレとの第一種未確認生命体との邂逅なんて僕がさせない！」
時雨は悪いと思いながらも不良近くのマンホールから激流を出し、彼女が違う方向を向いている隙に東の彼方に不良を吹き飛ばしたのだった。音に驚いて律火がそちらの方向を見るがそこには誰もいなかった。
「よっし！成功！」

律火は右方向からなにやら音がしたのでそちらのほうを見たのだが誰もいなかった。
「・・・何かしら？」
だが、探しても何もないということは幽霊か透明人間の仕業だろう。彼女が関与することは無いと思われるということで彼女は再び先生に頼んで渡してもらった元同じ高校の男子生徒が住んでいる住所を見たのだった。
「・・・ここら辺りなんだけど・・・」
彼女の内心はめらめらに燃え上がっている。会ったらぶったたいて・・・・
「・・・それじゃ、変わんないわね・・・」
拳を握り締めていた自分を恥じて彼女は着々と時雨がいる方向と時雨がすんでいるアパートへと向かったのだった。

「や、やばい！別に何もやばいことしていないのになぜだろう、ものすごくやばいと感じてしまうこの心は壊れているのだろうか？」
こっちに向かってくる幼馴染に彼はてんぱった挙句にぎょっとしていたのだった。

「く・・・こうなったら・・・・・」

彼女はぎょっとした。電柱の隣に良く見知った幼馴染にそっくりの噴水があったからだ。天に両手を突き出してそこからどういった原理なのかわからないが水が出ている。

「・・・・・へぇ、珍しいわね？」

律火はそういって鉛筆を取り出して、目の前の噴水の像の鼻の穴につっこんでやった。

「ふが！？」

「ふふっ、まさか像がしゃべったりするわけないわよねぇ♪」

「・・・・・」

「さ、次は・・・・・どうしてくれようかしら？」

目の前でにこにことしながら何かを取り出そうとしている相手に時雨は

「もう駄目だ。自分はこのままやられてしまうに違いない！」と叫んでいたのだった。

「・・・・」

「あ！兄さん！」

声がしたのでそちらのほうを見ると春乃がこっちに走ってきていた。律火の姿を捉えるとさらに加速しやってきた。

「律火さん、また兄さんを・・・・兄さんに近づかないでください！」

そういって時雨の鼻の中につめられている鉛筆を引き抜く。時雨は涙を溜めながらちょっと

「変になりそう・・・」と呟いている。

「へぇ、ブラコンが出てきてどうしたの？こんな弱い男のどこがいいんだか？」

「あなたには関係ありません・・・行きましょ、兄さん」
時雨の手をとるとあっさりと歩き出す春乃。時雨は何も言わずにつれられてその場を後にしたのだった。
春乃はちょっと呟いた。
「・・・・なんであの人が・・・・」
「さぁ？」
時雨はそう呟くしかなかった。

彼らが消えた後で律火は電柱に頭をつけてぼーっとしていた。
「・・・・馬鹿だ」
時雨を見ると非常にいじめたくなる性格がここでも出てしまった。その結果は最悪なものを生んでしまう。やはり、あの妹が出てきたかとも彼女は思った。
「・・・・よ、よし！この私に出来ないことなんてないんだから、こ、今度は謝ることにするわ！あ、あんな奴に頭を下げるぐらい私には出来るわ！」
彼女はそうやって拳を握り締めたのだった。

「よし、今日の晩御飯はチョコ〇ットにしよう！」
「兄さん、あんまり変わってないよ？」
一緒にお菓子コーナーに立ちながらそんなことを言っている。
「じゃ、春乃は何食べたいの？」
「そうだなぁ～・・・お肉かな？」
「わかった、お肉だね？」
そういってお菓子コーナーからようやく離れてまじめに動き始める。
「じゃ、今日は豚のしょうが焼きにしよう」
「・・・・ねぇ、兄さん、何であそこに律火さんがいたの？」
突然そう切り返されたのだが、時雨は冷静に答えた。
「知らない。たまたまあった」

自分が間抜けな行為に出てしまったのは口に出さないでおいた。
「・・・・・ねぇ、何でやめて欲しいって言わないの？」
「ん～それはね～・・・僕には出来ないからさ・・・それに、もう会わないよ」
「それもそうかぁ・・・」
育ちで似てしまったのか、二人とも脳内にはきっとお花畑があるに違いない。とても幸せそうにあははと笑っている。

アパートに帰って晩御飯を用意し始める時雨の耳におかしな声が聞こえてきた。

「起きろ！さっきから何を言っているんだ？」
「はぁ？」

突然、そんなことが聞こえているのに対して時雨は冷静に答える。

「僕は起きてるよ？これから晩御飯を用意するんだ」
「おいおい、とうとう頭の中までやられたか？さっさと、起きるんだ！」

その答えに対しても時雨は答える。

「起きてるって！」
「起きている人間は目を瞑って答えたりはしないぞ？」

時雨はなんだかいらいらしながらも、再び答える。律儀に答えずに無視していればいいのに・・・・

「僕は起きてる！そうじゃないというのなら起こせばいいじゃないか！」

「わかった、それなら力づくで起こさせてもらおう！」

時雨のほっぺを誰かが思い切り叩いた。

「うがっ！！」

時雨はようやく目を覚ましたのだった。

そこに広がっているのはクラス全員のおかしそうな顔だったのである。

ここに、ようやく時雨の本当の物語が動き始める・・・・

紅い薬：さて、転校をしよう

定義するということは大切なことである。たとえば、自分とは何か？詳しく述べていくと限りはあるだろうが、果てしなく遠いだろう。

人によって物事を定義するのはばらばらである。その起こった事象を詳しく定義するのか、はたまた、軽く定義するのかは自由である。

彼の場合は・・・・

四、

「あ・・・・え？」

僕を皆が見ている。理由は・・・・・残念ながら寝ていた僕にはわからない。

「あ～天道時時雨君だったかな？」

新米教師と思われる人物が僕を見てすまなさそうにしている。

「そんなにつまらない授業だったかな？」

「いえ・・・・その、引越しが忙しくて寝てなかったんです」

事実を告げると新米教師である先生はほっと胸をなでおろして僕に確認するように言った。しかし、先生の授業が退屈であるというのも事実であるが、僕はそんな場の空気を読めない人間ではないので口には出さなかった。

「ああ、そうか・・・天道時君は今日で引越しするんだったね・・・」

他のクラスメートたちは驚いたような視線を僕に向けてくる。しかし、話しかけてくる人たちはそんなにいない。それは・・・・そうだろう、なぜなら、僕がこの高校にいた日数は一か月分にも満たないからである。話しかけてこないのはそこまで仲良くなれなかったからでもある。

「うんうん、それじゃあ・・・疲れていると思うけど、きちんと僕の授業を受けてね」
「はい、すいませんでした」
そういって僕はよだれのついているノートを先生から隠すようにして退屈な授業を再び受け始めたのだった。

引越しとなった理由は不明・・・・というわけではなく、これがもう、ついていないとしか言いようがない。さぁ、これから高校生活の華やかな生活が始まるぞ！というときになって僕は最初からやらかしてしまったのである。僕が今日いなくなってしまう高校は非常にレベルの高い高校ではなく、中の上が行く人たちがおおい。しかし、不良だっており、僕は・・・・不良に目をつけられてしまった。
「おい、入学式終わったら面かせや・・・・場所は体育館の裏・・・・二度と学校にこれないようにしてやるぜ」
恐怖の前に
「うわ、本当にこんなことを言う人がいるんだなぁ」と思ってしまった僕なのだが、嫌々ながらもそこに行くと既に三人ほどのリーゼントやオールバックといったいつの時代の人間だろうかと思うような人たちがいたのだ。三人が三人、どの人たちも会話に熱中しているのか僕が近づいてきていることに気がついていないようだった。
僕はその三人の背後から忍び寄って・・・・・・

次の日、僕は校長室に呼ばれた。
「君かね？やったのは？」
「ええと、何を？」
「昨日、体育館裏に三年生が三人倒れていたそうだ。目撃情報によると君とのことなのだが・・・・それに、意識を回復した三人も君がやったと口をそろえて言ってるぞ」
どうにも、誰かが密告したらしい。その後、母親を学校に呼び、

僕の処分が決定する前に、僕は転校することに決めたのである。
噂というものはひろがるためにあるものなのか、知らないが・・・・僕のやったことは非常に悲しいことに全校生徒が知っているようだった。肩身の狭いこと狭いこと・・・やれ
「バットでぼこぼこにしただの」やれ
「鉄の竹刀で頭をかち割っただの」やれ
「三味線の糸で吊るした」だのと・・・・まったく違うことになっていた。僕が実際に行ったことはそんな物騒なことではない、浣腸である。浣腸したら三人が三人、不意打ちに対して予想以上の驚きを見せてそれぞれがそれぞれ、頭を打ち付けてしまったのだ。それをやった僕は非常に気まずくなり、そこから逃亡・・・・しかし、誰かがその光景を見ていたらしい。

とくに何も思わなかったのだが、僕は校門で自分がこれまで通っていた高校を眺めた。そこに聳え立つコンクリート四階建ての建物は僕に最後の別れを言うこともなく、ただ、立っている。僕にとって今となってはどうでもいい存在となってしまったその建物に僕は別れも言わないままにその場所から立ち去ったのだった。
基本的に僕は今、一人暮らしなのだが・・・・今度から行く学校には僕の妹がおり・・・・この妹とは血がつながっていないのだが、優秀な妹でよく母に比べられてしまう・・・・久しぶりに実家に帰ることとなっている僕にとってはまぁ、いい機会だろう・・・・実際のところは一ヶ月ぶりなのだが・・・・
母が僕を迎えに来る時間にはまだ余裕があるので僕はあまりうろつくことが出来なかった街中をうろつくことにした。時間に余裕はあるのだがあまりうろつくことは出来ないので前々から気になっていた裏路地のほうに歩を進める。
「平和だなぁ・・・」
この街が平和なので裏路地には目つきの悪い人物などおらず、猫が歩いているぐらいだった。さびれているのか、あまり店はなく人

通りも少なかった。店があったとしてもどうやら夜から営業を開始するようなところである。
ひとしきり歩くと、一人の男性にあった。その男性は白衣を着ていて細身で、四角い眼鏡を掛けている。挨拶して通り過ぎると・・・
「おっと、君・・・もしかして天道時さんの息子さん？ええと、名前は？」
「え？」
突然たずねられたので反応できないでいると相手は僕が目の前の人物を不審者であると感じたらしい・・・・にこりと笑って白衣に手をつっこむ。
「ああ、こんな不審者には名乗れないか・・・申し遅れたね、私の名前は白野羽翼だ」
そういって名刺を差し出す。少々汚れている・・・・コーヒーのしみだろうか？・・・・名詞に刻まれている文字をまじまじと眺めるとどうやら有名な薬品メーカーのここの支部長さんらしい。僕の父さんと同じ会社の人のようだった。
「ああ、なるほど・・・・父さんと同じ会社の人ですか？」
「よかった、人違いじゃなくて・・・・・悪いけど、この薬を君のお父さんに渡しておいてくれないかな？」
そういって手渡されたのは一つの箱だった。しかし、薬が入っているとは思えないような・・・どちらかというと、指輪が入っていそうな箱だった。
「何の薬なんですか？」
「それ？ああ、そういえば・・・・子どもに飲ませるんだって言ってたなぁ・・・・最近、何かあったそうじゃないか？」
学校のことを話したのだろうか？確かに、僕は最近ストレスのせいなのか気分がさえない。
「飲んでも大丈夫ですよね？」
「ううん、どうだろう・・・・まぁ、君のために作ったと思うよ？」
じゃ、よろしくねといってその人はいなくなったのだった。

一人暮らしをしていたアパートに戻ってくる。僕が高校に入学するにあたって持ち込んだものは既に何もなく、引越しムード全開だった。学校のことを考えると気分が悪くなってきた。
「薬でも飲もうかな？」
先ほどもらった薬を手に取り、水と一緒に飲み込む。錠剤タイプの紅い薬だった。
「・・・・？」
飲み込んだ瞬間、何かがおかしいと思った。目の前が真っ赤になり、僕の目に映るものはすべて真っ赤・・・・となったのだが、瞬きをしたら戻ってしまった。
「・・・・気のせいかな？」
そういうことにしておいて、僕は立ち上がり・・・・母が来るのを待ったのだった。

流れ行く景色を助手席で眺めながら僕は母に尋ねた。
「ねぇ、皆元気？」
「ん～そりゃ、あんたがいなくなってまだ一ヶ月も経ってないからねぇ～ほとんど何も変わってないよ」
そりゃそうだ。一ヶ月も経っていないのに変わるものなど、あまりないだろう。
「父さんは？」
「相変わらず、家にはいないよ」
そうだろう、帰ってくるのは正月とクリスマスぐらいだ。会うことが出来るのは風邪を引いたときか、写真ぐらいだろう。
車内ではそんな取り留めのない会話が永遠に続くのかなぁと思っていたのだが、ちょっと変わった調子で母が尋ねてくる。
「・・・・ねぇ、時雨・・・・」
「どうしたの？」
「家に帰っても驚かないでくれよ？それとね、あんた・・・何かし

たのかい？」
「何を？」
何かがおかしいと思いながらもその後、母は口を閉ざしてしまったのだった。

なつかしの我が家の目の前（といっても一ヶ月ほど前なのだが）で車は止まり、僕は降りた。母さんは途中で買い物をしたので僕と共に買い物袋を持ちながら家の中に入る。
「ストップ、時雨」
「ん？」
いきなり静止をかけられたので驚いたのだが、僕は止まった。手は玄関の扉にかけられている。
「・・・・実家に帰らせてなんだけど・・・・あっちの方角にアパートがあるのは知ってるだろ？そこの１０１号室が今日から時雨の住処だ」
東の方角を向いて説明をし始める母。
「・・・・・え？」
「え・・・って言いたい気持ちもわかるんだけど、これが少々厄介なことになってるんだ。覚えてないだろうけど・・・・とりあえず、わけはあとできちんと話すよ・・・・電話じゃ盗聴される可能性があるからね・・・・さっき車で話したことも盗聴されてないかどうか・・・・」
盗聴って・・・・それほど中身は重要なことなのだろうか？母と息子の間のたわいない会話の中にそれだけの情報でも詰まっているのか？
「わかったよ・・・とりあえず、そっちで生活すればいいんだね？」
「ああ、そうだよ・・・いいかい、知らない人についていったら駄目だからね？」
僕の妹に言うならまだしも、僕に言うのはどうかなぁと思ったのだが、昔からそういう性格の母にいまさら言っても遅いだろう。

「うん、いい子だ・・・・じゃ、今日は外食しておいで」
そういってお札を渡されて僕はその場を去ったのだった。

何らかの事情で家を追い出されてしまった僕なのだが、今まで独り暮らしをしていたのは間違いないので別に困るというわけではない。住む場所さえ用意してくれているのなら文句のない一言に尽きる。その気になれば公園にだって住み着く自身はある！
「おっと、こんなことを言っても意味ないな・・・」
慣れ親しんだ懐かしい道を歩きながら僕はちょっと急いで戻ることにしていた。既に太陽は眠いのか、その体を地平線のかなたに消そうとしている。
「・・・・？」
小走り状態となっていた僕の視界の中に大き目のダンボールが姿を現す。ああ、猫か・・・・と思って近づいていく。僕は猫が好きだ。犬も好きだが、猫は勝手にどこかに行くのが非常にいい。
アパートは犬猫厳禁だろうなぁと思いながらダンボールを覗き込む。
「・・・・ん？」
「あ・・・・・・」
そこにいたのは人だった。黒地のワンピースにと白いエプロンをつけている。そして、頭の上には白い三角巾らしきものがつけられていた。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
その手に握られているのは猫だった。ああ、なるほど・・・・きっと、この人は猫を見つけて自分もそのダンボールの中に入って猫と一緒に遊んでいるのだ・・・と。
「・・・」
僕は何も見ていないことにしてその場を後にした。しかし、相手はそうは行かなかったらしく、動かない猫・・・・実は単なるぬい

ぐるみだった・・・・・を掴んで立ち上がった。
「・・・・べ、別に捨てられたわけじゃありませんよ！」
どうしたのだろうか？ちょっと頭を打っているのかもしれない・・・・僕はぎょっとして相手を見た。
「雇い主がもう、君はいらない・・・って言って捨てられたわけではないんです！」
彼女は何かを必死に僕に伝えようとしている。僕だって意味は理解できているし、この人がお仕事を解雇されたのもわかった。だから、だから・・・それだから何なのだろうか？
「はぁ・・・そうなんですか・・・」
僕はガそういうと相手は何かを期待しているような視線でこちらを見てくる。そして、おなかをならせた。あわてておなかを押さえる女性
「・・・・違います、これはおなかの音ではなく・・・・」
彼女が言えたのはそこまでだった。その後、目をまわして倒れてしまったのである。とりあえず、僕は女の人を背負ってアパートへと向かったのだった。

紅い薬：さて、お世話になろう

彼が飲み込んだものは彼が飲み込んではいけないものだった。処方箋は適切に使用しなければ意味がないのである。副作用だって、ある。

彼が助けた人は彼が助けるべき人ではなかった。なぜなら、その分だけ彼は厄介ごとを背負い込むからである。一言言うが厄介ごとがこの世には多い。

彼が向かった場所は正しかった。彼の母親が向かえといった場所である。誰かに従って言うことを聞いたほうが人生は楽である。何より、考えなくていい。

五、

目をまわしている人を背負っているところは誰にも見られなかった。よかった。この状態を見られたらなんて言われるだろうか？

母から言われたアパートについて部屋の鍵をまわすと、以前・・・といっても僕が約一ヶ月ぐらい住んでいただけのアパートだが、その場所よりちょっと広い。

「よいしょっと・・・」

背中に背負っていた人を既に用意されていた僕のベッドに載せて、僕も一緒に・・・・・ではなく、彼女が掴んでいた薄汚れた猫のぬいぐるみを引っ張ってお湯につけて放っておく。こちらの処理はこれでいいだろう、後ほど、なくなった尻尾をつけるとしよう。

「さて、次は夕食・・・外食にはいけないだろうからね」

備え付けの冷蔵庫の中身を見るとどうやら母が一応夕飯を用意してくれていたらしい。それはとんかつだった。

「これは温めるだけでいいかな？」

簡単な調理を済ますべく、僕はそれを持って立ち上がったのだった。

あっさりと僕に用意されたとんかつは彼女の体内に消え、残されたものは皿だった。近くにあるコンビニからも弁当を買ってきてテーブルの上においていたのだが、それもなくなった。残ったのはこちらも容器だけである。
「・・・・ふぅ、とりあえずは急場をしのぐことが出来ました」
「はぁ・・・それは何より・・」
相手は座ってこちらを見てきている。その目は
「私の話を聞いてください」というものに変わっていた。僕は空気を読めないような男ではない。
「・・・・家はどこですか・・・・」
「家、ですか？・・・実に懐かしい響きですね・・・」
ものすごく悲しい顔をしてこっちを見てくる。どうやら、タブーだったようだ。
「あの、職業は？」
「職業ですか？・・・・お手伝いさんです・・・」
「ああ、お手伝いさんですか・・・・」
なるほど、見た目がそれっぽいと思っていたのだが、正しかったんだなぁ・・・
「お手伝いさんなんて今では珍しいですね？絶滅したと思ってましたよ」
「ええ、まぁ・・・ところで、あなたの名前は？」
さて、ここで正直に名前を言うべきだろうか？ま、まぁ・・・名前を教えるぐらいなら大丈夫だろう。
「天道時時雨です」
「なるほど、時雨様ですね？」
彼女は立ち上がると・・・・頭を下げた。
「では、今日から家事全般を受け持つことになった・・・ああ、申し送れました、私の名前は美奈です。これから、よろしくお願いしますね？ではさっそく・・・・」

「ちょっと待ってください、ストップ！」
「はい？何でしょう？」
「残念ながら、僕は自分で自分のことは出来ますから・・・・その、結構なんですけど・・・」
僕がそういうと彼女はとたんにその場に泣き崩れた。
「わ、わかってます・・」
よよよといいながら僕の膝を掴む。そして、足に抱きついてくる。
「うわっ！」
「お願いします！お願いします！給料なんて要りません！寝る場所と食べ物さえくれるのならどんなことでも文句言いませんから！お願いします！」
足をつかまれていたのであっさりと僕も崩れ、倒れてしまった僕の上に美奈さんは乗ってくる。
「うわっ！！鼻水！鼻水がつきますって！」
「ぶょねぐぁいします！」
そんなことをされても、僕の心は変わらない。
「・・・・わかりました」
変わらないんだが・・・・ま、まぁ・・・・いいか。
「ぶぁ、ぶぁりがとうごじゃいます・・・」
嗚咽と共に鼻水をエプロンでふき取り、美奈さんはその大きな目から涙をこぼしながら僕に礼を述べたのだった。これでこの問題が終わったということを僕は信じたい。

「では、時雨様・・・お休みなさいませ」
「うん、お休み・・・・」
その後、必要以上のお世話を僕にかけようとした美奈さんであったのだが・・・さすがにお風呂はやばかった。何があったかは伏せるが、相当危険なことがあってそのおかげで心身ともに疲労してしまった僕はふらふらながらもベッドに倒れこんで・・・・
「あ、美奈さんの寝るところがないや・・・・」

今気がつけば彼女がやってきたのは突然のことで、寝る場所などこのベッド以外にない。重い体を引っ張って僕は美奈さんがいる部屋に戻った。

「・・・・ぐぅ～・・・・」

美奈さんはテーブルに突っ伏して寝ており、とても安らかな寝顔をしている。よほど安心しているようでよだれまでたらして寝ている・・・・

「あの、美奈さん？」

「・・・・ぐぅ・・・・」

「・・・・」

ほっぺたを叩いてみたのだが・・・・動かなかった。後ろから肩をゆすってみたのだが・・・・一向に起きる気配は無い・・・・既にお風呂には入っていたためか、彼女からよいにおいがしてきて・・・・

「ごくり・・・・」

何故か、僕は硬いつばを飲み込んだのだった。そして・・・・彼女の肩に手をかけたところで・・・・

「あ・・・・」

自分の姿が目の前にある鏡に写った。その姿はなんともまぁ、恐ろしいもので・・・無抵抗な羊に襲い掛かるような狼の姿をしている。鏡に写っているカーテンはちょっと開いていてたので、僕は誰かに呟いた。

「か、カーテンを閉めなきゃ・・・・」

僕はカーテンを閉めるために美奈さんからはなれ、カーテンを閉めようとして・・・

紅い月を見た。

「・・・・あ」

目の前が一瞬にして真っ赤に染まっていく。そして、その真っ赤

な視界の中に入り込んでくるものは人影・・・
『・・・・へぇ、おもしろいじゃねぇか？』
その人影が話しかけてくる。
「誰？」
『おっと、失礼・・・俺の名前はシグマだ。まぁ、助けてもらいたくなったら俺を呼べよ・・しっかしまぁ、綺麗な月だね～今日は挨拶に来ただけさ♪だが、襲うのはよくないなぁ♪』
相手はそういうと消えた。僕の手にはいやな汗が流れており、心を覆い尽くしているのは恐怖だ。そして、気がつけば、紅い月などどこにも存在しておらず、空に輝く月は蒼い・・・そして、黄色くぼやけている。
「・・・・どうかしたのですか、時雨様・・・・」
いつの間に起きたのだろうか？目がとろんとしている美奈さんがこちらを見ている。
「い、いや・・・・それより、寝ましょう？美奈さんの分のベッドがないんですが、そこで寝ていると風邪引きますよ・・・・とりあえず、僕の部屋に行っててください」
「そうですか・・・・でも、まぁ・・・・」
ぶつぶつ言いながら彼女は僕の部屋へと向かっていった。
「・・・・なんだったんだろ？」
僕はもう一度夜空を見上げて月が蒼いことを確かめてから自分の部屋に入ったのだった。既にそこでは美奈さんがものすごく幸せそうにベッドに寝ている。一人用のベッドなので僕は床に寝るべきだろうが・・・・
「・・・・・」
先ほどのこと・・・・紅い月のことを考えると無性に怖くなって僕は無理してでも美奈さんの隣に寝て枕を抱きしめながら眠ったのだった。
「・・・・時雨様、とてもお疲れのようですが？」

「・・・ん・・・・・ああぁ・・・」
　生返事しか出来ないし、小鳥のさえずりなんて聞こえてこない。あれから怖くて一睡も出来なかった・・・・・というわけではなく、美奈さんが隣にいてくれたおかげでとりあえず落ち着けたのだが、それからが大変だった。
順を追って説明しよう。
まず、隣を見れば美奈さんが静かに呼吸をしていて、僕はやましい気持ちに襲われ、手を出そうとして紅い月のことを思い出し、恐怖がやってきてまた、美奈さんの顔を見て落ち着く。その繰り返しで気がつけば時計が鳴り出してしまったのである。だが、なにやらそれだけが原因ではない気がしているのはなぜだろう？
「・・・・ああ・・・今日は・・・学校に書類を・・・・提出しなきゃ・・・・」
　そういえば母から渡された書類があった。その書類を今日、学校に提出しなくてはいけないのである。しかし、それさえ終われば今日は自由だ。明日から学校だから、今日はずっと寝ることが出来るだろう・・・・
「・・・あの、美奈さん・・・・」
「何でしょう？」
「僕の・・・お手伝いさんなら・・・・この小さいですが、この家の財政をお願いします・・・・大丈夫ですか？」
「ええ、任せてください！」
　目をきらきらしているところを見ると
「ああ！とうとう私もこういうことが出来る日がやってきたんだ！」という顔をしている。もしかしてだが・・・こういうことに関しては初心者？
「美奈・・・さん、あなたを信じてお財布を渡しておきます」
　しかし、こうなった以上彼女はがんばってくれるだろう・・・・彼女がお財布を持ってどこかに逃亡するかもしれないという不安はあるのだが、ここは彼女を信用してみたいと思う。そういうことで

僕は彼女にお財布を渡すとふらふらとした足取りで学校へと向かったのだった。
「行ってらっしゃい！」
美奈さんのうれしそうな声を聞いて・・・・・

まるで町を徘徊しているようなゾンビの足取りで僕が転校することになった高校へと向かうこととなった。きっと、知り合いたちが何人かはいるだろう。出来れば、会いたくない。夢の中の人物たちもなかなか魅力的な人が多かったのだが・・・・現実は現実である。
それ以降は特に考えずにふらふらとした足取りで他の高校生と混じって登校し、職員室へとやってきた。
「・・・すいません・・・・」
「・・・・？」
「明日からこの学校の生徒となる・・・・・天道時時雨です。校長先生に書類を私に来たのですが・・・・」
「ああ、聞いています・・・・顔色が非常に悪いようですが？」
「・・・大丈夫です・・・・書類を提出したらすぐに帰りますから・・・・」
目の前にいる教師の顔が三重にもぶれながら・・・まるで「フォフォフォ・・・」といっている宇宙人みたいだ・・・・僕は書類を相手に渡して方向転換した。
「保健室で休んだほうがいいのでは？」
「その心配は・・・・・」
いりません・・・・そういおうとした僕の視界に何故か、廊下が入ってくる。いや、今まで入っていたのだが・・・廊下の位置が右隣にやってきた。なぜだ？世界が四十五度傾いたのだろうか？
「だ、大丈夫ですか！？」
そういう声が聞こえてくるのだが・・・・僕の視界はだんだんと暗くなっていく。今となって気がついたのだが、これは僕が倒れたということなのだ。

「・・・・誰か！保健室に運ぶのを手伝ってくれ！」
ああ、この世にはいい人がいるもんだなぁ・・・・そう思っていると視界が真っ暗になる。そして、次は耳が聞こえなくなり・・・・意識が消えた。

目に当たる強烈な光に僕は目を覚ました。目がぼやけていて、灰色の何かが目の前にある・・・・としかわからない。何度か瞬きをすると黒と灰色が入り混じり、その結果・・・元は白かっただろう、天井がその姿を僕の目の前に現したのだった。
「お、起きたのかね？」
どこからか声がしてきて、僕は辺りを見渡した。何故か、体を動かすと非常に痛い。右隣から声がしていることに気がつき、僕はそちらのほうを見たのだった。

紅い薬：さて、どうしよう？

彼が目にするもの、すべてが紅・・・・
彼が見ているもの、すべてが紅・・・・
彼が目にするもの・・・・・・

六、
微笑みながら若干白髪が混じっている男性がこちらを見ている。
どうやら、この学校の保健の先生のようだ。
「あの・・・・」
「突然、倒れたんだ。覚えているかね？」
「倒れた？」
ああ、成る程・・・・僕は倒れたから保健室にいるのか。
「もう大丈夫かね？」
「ええ、大丈夫です・・・・すいません、ご心配をかけて・・・・」
「いや、何・・・・」
相手はそういって立ち上がる。
「どうだい？今から学校内を案内してあげようか？」
「いえ、今日は帰ります・・・・また倒れるかもしれないですからね」
「そうかね？まぁ、そうしたほうがいいだろうね・・・・」
気をつけてといって僕を送り出してくれた保健室の先生に頭を下げ、保健室を出る。
「ああ、時雨君だったかな？」
「何でしょう？」
「今日は実にいい月が見れると思うよ。世界がきっと、変わるだろうね」
そういって僕の目の前で保健室の扉は音を立ててしまったのだった。

目が覚めたのは既に夕方で、携帯に電話がかかってきた。急いで校内から出て町を歩きながら電話をする。
「はい？ああ、美奈さんですか？ええ、まぁ・・・・」
なぜだか番号を知っていた美奈さんからの連絡で、夕食を用意して待っているとのこと。これは急いで帰ったほうがいいだろう。しかし、なんだかおやつが欲しくなってしまったのでちょっと寄り道をして帰ることを彼女に伝えたのだった。
「さて、どこがいいかな？」
近所にあるコンビにではお菓子が少々高いので安い店を求めてほっつき歩くことにした。目に止まった店の中に入り、めぼしいものはないか探していくのだが・・・なかなか発見できなかった。
結局、チョコレート菓子を少しだけ買ってから帰ることにした。
「あちゃ～既に夜だよ・・・」
夜空には保健室の先生が言っていた通り、綺麗なお月様がその姿を惜しげもなく僕に見せつけてくれている。
昨日のことを思い出したのだが、一向に紅い月など見えてこないのであれは気のせいだったのだろう。おかげで学校内で倒れてしまうという事態に陥ってしまったことをひどく後悔してしまう。
「まぁ、いいか・・・・」
過ぎ去ってしまった事をいつまでも後悔していてはこれから始まらない。僕は一人帰りを待っていると思われるお手伝いさんの下へと急いで帰ることにした。

長年すんでいた場所での近道などはお手の物で、今も人があまりとおらないどちらかというと、猫が通っている場所を僕は歩いている。
「ここって結構いい場所なんだよね・・・」
寂しくないように僕は一人で呟きながら月を眺めつつ、帰路を急ぐ。静かな場所なのだが、今日はなんとなく騒がしい。
「・・・きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ものすごい声が辺りの静寂を蹴散らす。
「ん！？」
猫が普段は良く集まっている空き地に人影が見える。そこには三人ほどの人影が・・・・・どうやら、一人の女の子に対して二人の男が詰め寄っているらしい。以前から思っていたことなのだが、この町は治安が悪すぎる。
「かといって、僕が助けに行っても病院に僕が連れて行かれるだろうからなぁ・・・」
さて、どうしたものだろうかと悩んでいると声が聞こえてきた。
『じゃあさぁ、変わってくれよ。手加減するからさぁ？どうだ？あの子を助けたいんだろ？』
「ま、まぁ・・・」
『そうだろうなぁ、あいつら、むかつくからなぁ・・・・』
その声の主は笑っている。いや、嗤っている。
「じゃあ・・・大暴れとは行かないが、初陣は綺麗に済ませたいものだぜ！」

僕の目に映る月は紅かった。

「おとなしくしろよ！」
「んん～」
月を背に二人の男が一人の少女を押さえつける。少女は相手を睨みつけながらも口につっこまれた布のせいで声を出すことが出来ない。
「おいおい、一人の女の子に対して二人でせめるのかよ？そりゃ、邪道だぜ～♪」
「ああん？」
「邪魔すんじゃねぇぞ！ぼこぼこにされたいのか？」
「おお、怖っ・・・ってそれはどっちの台詞だろうかねぇ～」

月を背に、二人の男が倒れていた。
「ははっ！所詮はこんなもんだろうなぁ・・・・うまく使いこなせよ、この力をな！今日は気分がいいからなぁ・・・・」
最後に
「あばよ！」と告げて彼は去っていった。
「ふぅ・・・・一方的だったなぁ・・・ところで、君・・・・」
僕は倒れている相手に視線を落とす。そして、言葉を失った。
「美羽！？」
「あ・・・・に、兄さん！？」
そこにいたのは僕の妹だった。こりゃ、見過ごしていたら大変なことになっていただろう。
「大丈夫？何もされなかった？」
「う、うん・・・・兄さん・・・ところで、今日こっちに帰ってきたの？」
「いいや・・・・昨日帰ってきたけど？それがどうかしたの？」
久しぶり・・・・というわけではないのだが、彼女は僕を見てぎょっとしているようだった。
「とりあえず、今日は家にすぐに帰りなよ。送っていってあげるから・・・」
「兄さんは家に来ないの？」
「まぁね、もうアパート母さんが借りてるみたいだから・・・・」
「え？」
どうやら、美羽は聞いていないようだ。
久しぶりの兄妹での帰路。こんな風に一緒に並んで帰るのはいつが最後だっただろうか？確か・・・・小学校六年ぐらいだったと思う。
「・・・・・兄さん、何故、家に帰ってこないの？」
「え？そりゃ、まぁ・・・さっきも言ったけどアパートがあるから・

・・」
「けど、今日はまだ夕食食べてないんだよね？」
「まぁね」
僕がそう告げると彼女は身を乗り出してきて告げる。
「家で食べていきなよ！私、がんばって夕食作ったんだ！」
「そうなんだ・・・・」
しかし、今頃美奈さんが僕の帰りを待ってくれているだろう。
「だけど、ちょっと・・・・」
美奈さんのことをどうやって説明しようか？これはちょっとしづらいぞ・・・・というより、美奈さんの話をしても信じてくれないだろうな。
「ちょっと・・・・どうしたの？」
「ちょっと・・・・ええっと、今日はアパートにちょうど友達が来てて・・・もう、部屋にいる頃だろうからさ・・・」
「じゃ、駄目？」
「うん・・・・」
「そう・・・なんだ・・・」
しゅんとした表情にドキッとしてしまう僕・・・・ちょっと、待とう。冷静に考えてみればまったく持って馬鹿らしいことである。これでは青春の一ページではないか・・・何を自分の妹と甘酸っぱい一ページを刻んでいるのだろうか？
僕は急に笑い出して美羽の頭の上に手を載せる。
「ま、いずれ美羽のご飯を食べに戻ってくるよ」
「本当？」
「ああ、それまでに腕を上げてなよ？まぁ、すぐに戻ってこれるだろうけどさ！」
「うん！私・・・がんばるよ！」
自宅の目の前にやってきて美羽はもう一度僕のほうを見る。
「・・・・本当に来ないの？」
「いかないよ・・・友達が待ってるからね。じゃ、何してたか知ら

ないけど、夜道は怖いお兄さん方が多いんだよ。今度から気をつけなよ」
「けど、いいお兄さんもいたよ？」
「そんなのはいないいない」
「私の兄さんは大丈夫！」
そういって玄関の扉を開ける美羽。
「じゃあね、美羽」
「うん・・・助けてくれてありがと、兄さん」
「当然のことをしたまでさ」
僕はそういって美羽と別れたのだった。

家に帰りついた僕を待っていたのは勿論、美奈さんだった。
「お帰りなさいませ・・・」
「い、いやぁ・・・なんだか照れるなぁ・・・・」
「いえ、当然のことをしているだけですよ。お手伝いというものはこういうことをするべきだと私は思っていますからね・・・・ささ、夕食を作っておきましたので、こちらへ来てください。先ほど出来たばかりですのでまだ暖かいはずですから！」
美奈さんに案内されてやってきたところには昨日のリビングとはまったく違って綺麗になっていた。
「す、すごい！？これ、美奈さんがやったの？」
「当然ですよ！このくらいは平均です」
光り輝くフローリングに塵一つ見えないテーブル。テーブルの上には花瓶が置かれており、見たこともない花が咲いていた。
「この花は？」
「この花ですか？時雨様の部屋に飾ってあったものです。いやぁ、なんて名前の花でしょうか？ちょっと私には理解しかねます」
「ふぅん・・・」
花のことは置いといて、美奈さんがテーブルの上に料理を持ってくる。今日の献立は野菜スープにオムライスだった。

「ささ、どうぞ召し上がってください」
「うん・・・・あれ？美奈さんは食べないの？」
「ええ、こういうときは傍に控えておくのが常道ですから・・・・・いつでも時雨様の言うことを聞けるようにしないといけませんからね・・・」
「じゃ、悪いけど目の前の席に座って一緒に食べてくれないかな？話し相手も欲しいから・・・・」
そういうとちょっと迷っているようだった。
「でも・・・」
「お願い」
「・・・・わかりました」
そういって美奈さんは自分の分を持ってきて僕の目の前に座って僕のほうを見る。
「ど、どうしたんですか？」
「いえ、作った側としては早く意見を聞きたいなぁと思いまして・・・」
「あ、わかりました・・・」
僕はオムライスの山を少しだけ削って口の中に運ぶ。
「・・・おいしいですよ？」
「そうですか、よかった・・・・初めてだったので緊張したんですよ」
最後のほうは聞かなかったことにしよう。
「時雨様、学校はどうでしたか？」
「別に今日は授業を受けたわけじゃないんだけど学校で倒れちゃった・・・・」
「ほ、本当ですか？」
そういうが早いが、僕のおでこに手を載せる。
「だ、大丈夫だって！」
そういっても彼女は信じてくれそうにないほどの真剣さだった。

紅い薬：さて、約束を果たそう

アマヤドリは紅いものが大嫌い。世界を捨ててでも逃げる。それを持っているものはアマヤドリの天敵となる。アマヤドリは臆病。
しかし、彼がどうなるかはわからない・・・・・この物語は不思議に終わる。

七、

「み、美奈さん・・・・ぼ、僕もう駄目・・・・」
「ふふっ、時雨様ったら・・・・お早いのですね・・・・」
それから二秒後、僕の右腕はテーブルに着いたのだった。
「み、美奈さんって腕相撲強いんですね？」
「ええ、まぁ・・・」
腕相撲でここまで体力を消費するとは思わなかったのだが・・・・
まさか、美奈さんに負けるとは思っていなかった。
「時雨様・・・・今宵は良い、お月様が出ています。散歩など、どうでしょうか？」
「え、でも・・・・そろそろ寝る時間じゃないんですか？」
「ええ、無理にとは申しません。どうでしょうか？」
何か話したいことでもあるのだろう・・・・彼女は僕を見て目で訴えかけている。
「わかりました。一緒に散歩に行きましょう」
「ありがとうございます♪」

月は輝き、僕らは月光の元を歩いていた。散歩といっても近所の公園に来たぐらいである。
美奈さんは月を眺めながら僕に話しかけた。
「・・・・・時雨様にちょっとお話したいことがあります」
「何です？」

彼女はそういって僕の目の前に立つ。
「・・・・時雨さま・・・・・・」
「え、えええっ？」
美奈さんは僕を抱きしめた。長身の彼女なので僕の顔はちょうど美奈さんの胸の部分に当たっている。
「え、えと？どうしたんですか？」
「不安なんです」
「何がでしょうか？」
美奈さんの目には何が映っているのだろうか？
「・・・・以前、私が仕えていた・・・・人は時雨様と同じように紅い薬を飲んでしまった方なのです」
「あれ？美奈さんに薬の話しましたっけ？」
「いえ、時雨様の口からは直接は聞いていません・・・・・」
恥ずかしくなってきたのでそろそろ放してくれないかなと思ったのだが彼女は許してくれなかった。
「紅い薬はどのような成分が入っているのかまったく知りませんが、別人格を形成し、圧倒的な力を授け、朝のお通じも良くするという薬です」
「いや、最後のは別にどうでもいいことなんですが・・・それより、あれって風邪薬じゃないんですか？」
僕がそう尋ねるのだが、彼女は答えてくれない。僕はそろそろ頭から煙が出てきそうである。
「いえ、違いますが・・・・・その薬が何のためにあるのかはわかっています」
「ど、どういうことですか？うっ！」
そろそろ鼻のほうも限界を突破しそうである。
「その薬は・・・・アマヤドリという化け物を倒すために存在するためにあるんです」
「あ、アマヤドリ？それって雨宿りですか？」
雨宿りのことなんてどうでもいい。今はこの・・・・その、むか

むか？いや、むらむら？を押さえ込みたい。頭がおかしくなってきそうだ。
「アマヤドリ・・・・・正確に言うなら雨矢鳥ですね。そのアマヤドリがどのような姿をしているかはわかりませんが・・・・私の昔の主人を倒したのは間違いありません。紅い薬を飲んだものが死んでしまったとき、その薬は再び紅い薬となるのです・・・・基本的に世界に一つしかないものですからね・・・・」
つまり、あの時飲んだものは美奈さんのもとご主人様みたいなものなのか・・・・・
「ついてないなぁ・・・」
「それを飲んでしまったのなら別に構いません。その事実は今日知りました」
そういって美奈さんは笑ったのだろうか？
「え？今日？」
「ええ、時雨様のお父さんがやってきたんです。何でも、今日から行方不明になるからよろしく息子に伝えておいてくれって言ってました」
「・・・・・」
どこの世界に息子に行方不明になると告げる父親がいるのだろうか？いるなら連絡ください。
「でも、そのアマヤドリってものを倒せば僕は別に大丈夫なんですよね？」
「いえ、わかりません・・・・今、絶大な力を持っているというだけの理由でアマヤドリは倒されようとしているのです。今まで、戦ってかった人なんて一人もいませんけどね・・・・けど、もしもアマヤドリを誰かが倒せばアマヤドリをしのぐほどの実力を持つもの・・・つまり、第二のアマヤドリといわれても過言ではありません。そして、その人物もアマヤドリと同じように倒されてしまうでしょうね・・・・」
つまり、どっちに転んでもいいことはないということなのである。

これはまた、困ったことになった。アマヤドリか・・・なんともまぁ、おかしな話である。このときになってようやく美奈さんが放してくれたのだが・・・今となってはなんとなく、名残惜しい。
「・・・・美奈さん、アマヤドリってどこにいるんですか？」
「アマヤドリですか・・・・？」
雨がいきなり降り出した。
「・・・・このように唐突に雨が降ってきて・・・・」
降り注いだ雨は光の線となり・・・地面に突き刺さっている。
「どうぞ、傘にお入りください」
傘の中に入れてもらうと傘に突き刺さって僕らにはなんともなかった。
「・・・・まぁ、こんな感じの時に現れると言われています」
「なるほど、それが今のときか・・・・」
「ええ、噂なんですけどアマヤドリを見たものがいないのは見ると記憶を消されてしまうそうです。アマヤドリ自体を見てはいけないのか、その目を見てはいけないのかのどちらかなのですが・・・・」
なんともまぁ、めちゃくちゃな存在である。そう思っていると僕の目の前に七色に光る一つの扉が形成された。さて、これからどうしたものだろうか？今すぐ傘を飛び出して・・・・僕がするべきこと。公園の近くに人影はないし、アマヤドリを倒すのは今しかないということなのだろう！
「シグマ！力！力が欲しい！」
僕は傘を飛び出した。そして、紅い力を持つシグマに話しかける。
「力か？力・・・いいだろう、この力、お前に貸そう！」
僕は七色に光る扉を通り抜けた。

そこにひろがるものは永遠の闇だった。
そして、目の前にいるものは卵だった。
「・・・・これは？」
『ん？おやまぁ、またもや私を卵焼きにしようというやからがやっ

てきたのかい？』
卵がしゃべった。そして、とても全うなことをしゃべった。
「・・・・・いえ、あの、あなたはアマヤドリですか？」
『ああ、そうといえばそうだけど、違うといえば違う』
「・・・・」
どっちなんだろ？
闇は光を生み出したのか知らないのだが、だんだんと七色に光る何かが僕の周りを過ぎていく。
『お前はここに何をしに来た？』
「え、えっと・・・生きるため、敵を討つためです！」
『敵を討つって・・・・何をいまさらって話だね・・・』
卵がかすかにわれ・・・一つの目玉が僕を捉える。
『よくもまぁ、何も知らないガキがふざけた口を・・・・』
卵は割れていき・・・・ツバサが現れる。
『この世界は誰のものか・・・・あんた、知っているかい？ここは私の世界。私が手に入れた世界さ・・・・』
ツバサが卵から生えただけで卵自体はそこまでである。
「・・・・あなたの色は何ですか？」
『色？そりゃ、卵だから白いだろ？』
「僕には紅に見えます。ええ、真っ赤です」
『へぇ、あいつらはとうとうこんなガキでも試そうとしたのかい？これじゃ、私は退くしかないねぇ・・・・・』
アマヤドリは僕の目の前から姿を消した。
「・・・・・あっさりとしすぎている」
目の前からさった相手に対して僕は疑念を抱くしかなかった。
「・・・・・アマヤドリは紅いものを嫌います」
「・・・・美奈さん？」
後ろにはいつの間にか美奈さんが立っていた。
「ここは・・・・私が逃げてきた場所です。ご主人様をおいて・・・・」

光はさらに加速していき、僕らは幻想的な世界にいた。
「・・・・時雨様、とても短い間でしたが・・・・私はあなたのお世話を出来てよかったと思っています」
目の前には今にも壊れそうな扉があった。
「・・・どうぞ、急いでここを通り抜けてください」
「え？」
「早く！」
「わ、わかりました・・・・すいません・・・」
ものすごい剣幕でそういわれては僕も頷くしかない。
「・・・・あ、あの・・・・最後に・・・・最後に美奈さんを抱きしめてもいいですか？」
「・・・・ええ、構いません」
僕は最後に美奈さんを抱きしめた。
「・・・すいません、美奈さん・・・・僕は、僕は残念ながら人見知りをする質なんです」
「え？」
僕は黙って美奈さんを突き飛ばした。
「・・・・他人を巻き込むほど、まだわがままじゃありません。残念ながら・・・・」
光の窓を通って彼女の姿が消え、僕の目の前から人は完全に消えてしまった。

「やれやれ、やっと思い出したよ・・・・・」
「・・・・久しぶり、時雨・・・・・・」
「ども、美羽さん・・・・・」
目の前に現れる予定だったのだろう、いつかの彼女がいた。
「・・・・アマヤドリに憑かれた世界は消えるだけ・・・・これで私はあなたに頼んだ仕事を見届けることができた・・・この世界はあなたのもの・・・・」
「・・・・ありがとうって言いたいけど、夢を果たした今・・・・

なんだかとても寂しい気がするんだ」
「それはそう・・・あなたは人類の敵になったのだから・・・・」
「そうだろうね、だけど、この世界ではさまざまな人がいるんだ。だからさ、僕も悪いけど、アマヤドリと同じでこの世界を去るよ。じゃあね」
「・・・・ばいばい・・・・また、どこかで会えることを私は祈るよ」
時雨は携帯を取り出してどこかに連絡を取った。
「ああ、うん・・・そう、僕。今日、君はたぶん、変わった世界を見ることになるよ。覚悟があろうと無かろうと・・・・じゃあ・・・・ね」
そして、携帯をどこかに投げて彼は一つの窓へと飛び込み・・・・

この物語は終わった。

B：目覚めぬ龍の夢（前書き）

次回からは知っている人は知っている知らない人は知らない物語が始まる予定です。

B：目覚めぬ龍の夢

プロローグ～Ｉ　ｄｏｎ’ｔ　ｋｎｏｗ～

「ん？」

さっきまで誰からかわからない電話を聞き流してきた。俺には良くあることで、相手は公衆電話から意味不明なことを述べて勝手にきってしまう。きっと、中学の頃の友達だろう。

俺は高校一年の入学式の帰り道に橋の下を覗こうとしたのだが……

「おい、こんなところで油売っている暇があったらさっさと家に帰って夕食を作れよ！」

「あ、はい……」

俺が居候先として厄介になっており、師匠でもある人物がとても怖い顔で睨みつけてくる。ぞんざいな口調だが見た目麗しの女性である。

「また、酒でも飲んできたんですか？」

「ああ、今日はくだらねぇ、仕事ばっかりだったからなぁ……ご老人と飲み比べなんて馬鹿な仕事がこの世にあるとは思わなかったなぁ……」

「じゃ、今日は胃に優しそうな夕食を準備しておきます」

「ん、ありがとな……ところで、何を見てたんだ？」

「えっと、橋の下に何かいたような気がして……」

「ああ……」

頭をぼりぼりとかきながら橋の下を眺め……一瞬だけ、鋭い表情を見せる。

「今、絶対に行くなよ？あそこには私の秘蔵の酒があるからな……行ったら今夜の修行は手を抜かずにボコボコにしてやるからな？」

「あ……わ、わかりました」

酒のこととなると非常に怖いこの人のことだ。本当に言ってしま

ったら吊るされて井戸に落とされる可能性が高い。
「ほら、おとなしく帰りな！これも修行だと思って全速力で帰れよ？」
「わ、わかりました！！」
俺は帰り道を間違えることなく、そして、もてる力をすべて吐き出して走り出した。

「……本当にあの師匠の孫ってだけはあるな……もうちょっと来るのが遅かったらあいつは間違いなく見てただろうなぁ……せめて、あと一年だけ猶予が欲しい」
彼女は橋の下へと向かっていき、そこにいた相手を川に放り投げたのだった。
「やれやれ、輝にはまだしゃべっちゃいけないってのがつらいねぇ～」
彼女はそういってその場を後にしたのだった。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：雷は昼、落ちる（前書き）

さて、今回から新しい物語？というわけでもありませんが……今までとはちょっと違う物語となります。あとがきのほうでお願い事を書いておきますので、ぜひ、読んでいただけると嬉しいです。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：雷は昼、落ちる

一、

俺は今、絶対絶望？と思われる窮地に立たされている。否、既に崖から落ち掛けである。

「しゃ～」

「……」

目の前にいるのは紫電を纏う一匹の蛇……いや、これは蛇というものではなく、一般的に言って龍というものだろう。いやぁ、かっこいいものだ……

さて、冗談はさておき何故このような状況に陥ったかというと……

とても心地よい高校二年生の始めの授業の日……名乗り遅れたが、俺の名前は白羽輝（しらはあきら）である。

とりあえず、その日の授業は滞りなく進み、俺は帰宅の途についた。部活をするべきだろうと思ってきたのだが俺は今すぐ家に帰って家事をしなくてはいけないというわけである。別に一人暮らしをしているわけでもないのだが、居候をしている身としてはその程度のことはするべきだというのが俺の意見だ。幸い、俺が厄介になっているところは俺を含めて三人しかいないので楽である。

「さて、今日はどんな物を作ればいいんだ？」

献立に悩むどこぞの主婦のように俺は夕焼けの下そんなことを考えながら歩いていたのだった。無論、この後の予定は買い物である。

その日の天候は晴れだった。雨など降らず、ましてや……ましてや、雷など落ちる確率などゼロだと俺は思っていた。それに、俺が毎朝欠かさず見ているお天気お姉さんの天気予報でも雷が鳴りますとは言っていなかった。あの人は嘘を言わない人物だ。

しかし、現実に……雷が落ちてしまった。

「しゃぁぁぁぁぁぁ！！」

そして、雷と一緒に龍も落ちてきたのである。俺の目の前に……

以上が今、俺が悩んでいることベスト3の第2位だ。ちなみに一位は今日の献立である。

「はぁ……何故、俺は威嚇されているのだ？しかも、まだ献立が思いつかん」

全身の毛を逆立てて相手は俺を威嚇している。対して俺は両手を上に挙げて無抵抗のポーズをとっている。しかし、この無抵抗のポーズが爬虫類？に通じるとは思えない。

「……もっとも、日本語自体が通じるかもわからんな……」

「しゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

とても緊迫した状況（そうはおもえないが）である今に俺は何をすべきだろうか？にらみ合う二人の周りの空気は当然張り詰める。誰かがおならなどしようものならばこのシリアス展開をぶち壊してしまったということを罪に神に裁かれてしまうに違いない！

ぐぅぅぅぅぅ～

「……」

「……」

神様、お腹の音はどうでしょうか？いえ、断じ俺ではありません。ああ、目の前の龍が

「ちょっとおなか空いちゃって……ごめん」的な顔をしているのですが？裁かれるべき存在なのでしょうか？さばいてくれると俺は障害物がなくなって嬉しいのですが？

「……あ～その、なんだ？腹が減っているのか？」

とりあえず、これでシリアス展開は終わってしまった……いや、あれ自体がシリアス展開だったのかはわからないが……今は考えるときではなく、行動する時だ。

「ほら、腹が減っているのならこれで見逃してくれ。お前を見てい

ると、巨大な蛇に人間が飲まれる映画を思い出すからな。あれはやばかった。いやぁ、マジ怖かったな」
俺はそういって相手に鞄を投げつけた。中にはパンが入っている。パンを食べるかわからないが、物は試しである。嗅覚が鋭いのなら、一発で見つけてくれるだろう。
「……」
龍は言いたいことが伝わったのか知らないが、鞄を開けて中のものを物色し始める。まず、口にしたのは……
「それ、筆箱。食べたいなら食べてもいいけどのどに刺さるぞ、絶対」
「……」
筆箱を地面に置いて次に取り出したのは……今日あった小テストの零点である。
「おいおい、何だ、そのあちゃーって顔は？理解できてんのか？そのテストはなぁ、たまたまだ。名前を書くのを忘れただけだぞ……」
「ふっ」
非常に頭にきた。何だ、
「まぁ、零点には変わりない」って顔は？片眉上げて微笑むんじゃねぇ！
龍はそのテストを鼻で笑った後で地面に置き、先ほどの筆箱から赤ペンを取り出して何かを書き始めた。
「……大丈夫、見た目が馬鹿そうだから、中身が馬鹿でも驚かない？……ほぅ、この爬虫類め……上等じゃねぇか！せっかく人が好意でパンをあげようとしていたのに！」
俺は龍に踊りかかった。無論、人を馬鹿にした報いを受けさせるためである。
「しゃぁぁぁぁぁぁ！！」
「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
龍の下あごに一撃を繰り出し、相手に噛み付かれながらも二発目を腹部に食らわせ、相手から距離をとる。結構な手ごたえを感じた

のはうれしいことだが……相手は完全に倒れてはいない。しかし、龍とテストの結果で戦うとは思わなかった。
「ぐるる……」
相手は悔しそうにその場にへたり込んだ。バチバチとした電気も体から発生していない。
「……よし、今日の晩御飯は龍鍋だな」
「！」
暴れ始めた龍を押さえつけてそのまま引っ張って家につれて帰ることにしたのだった。いや、龍のさばき方なんて知らないけどさぁ、まぁ、いいじゃん。成り行き。

「ただいま帰りました！」
「おうお帰り……おい、それって龍じゃないか？」
そこにいるのは鋭い眼光を持つ女性である。年齢は不詳で、俺の爺ちゃんの弟子だった人だそうだ。幼い頃から爺ちゃんの家で過ごしてきた俺は爺ちゃんが死んでしまってからはこちらの家でお世話になっている。一応、親戚関係とのことである。だから、
「おばさん」と呼んでしまうときがたまにあるのだがそのときは容赦ない鉄拳制裁が開始される。
一言言わせてもらうのだが、この状況になっても顔がまったく変わらないのが怖い。
「今日は龍鍋をしようかと思いまして……」
「龍鍋？そんなガキの龍食っておいしいとでも思ってんのか？しっかしまぁ、やっぱりあんたはお師匠様の孫だ。その歳で龍を連れてくるとは……輝、こいつと戦ったのか？」
「ええ、戦いました」
「良かったな、こいつが大人じゃなくて……今頃、お前は落雷に当たって死んでいただろうよ……お前が今晩のおかずになっていたかもな」
そういって俺から龍を取り上げておばさん……本名白羽光仁美（しらはこうじんみ）（こと）

琴さんは去っていったのだった。そして、再び戻ってきて俺に告げる。
「いいかい、私がいいって言うまでこっちに来るんじゃないよ？来たら警察呼ぶからね？」
いや、呼ぶなら保健所じゃないんでしょうか？龍を処理するにはどうしたらいいんでしょうかねぇ～。
そう思って突っ立っていたら美琴さんは苛立ちを隠さないでこっちを見てきている。
「ほら、何をぼさっとしているんだい！さっさと夕食の準備をしないか！」
「あ、すいません！」
俺は慌てて彼女の言うとおりにするべく、台所へと向かったのだった。

何も思いつかない日は味噌汁に限る。
手抜きと思われてしまうかもしれないが、こうするのは非常に楽なのだ。
言い訳も出来る！何故なら、俺が居候している先の家は日本家屋で、庭が広い上に池があり、道場だってあるのだ！それに、おばさんはあまり洋食が好きではないのか知らないのだが……この家では原則、そういったもの（洋風の食べ物）を食べてはいけないのだ。外で食べる分には文句はないらしいのだが、この家で洋食を食べた日には美琴さんの夫の泰助さんのように毎晩縄で吊るされてしまうだろう。
「美琴さん、夕食できましたよ？」
「ん～わかった」
やってきた美琴さんに俺は尋ねる。
「今日は泰助さんは遅いんですか？」
「うんにゃ、そろそろ帰ってくるかと……ところで、お前は本当に分別も何にもない男だね？」

「何がです？」
俺はそう言って手製の味噌汁に手をつける。結構いい出来だ。
「……普通、味噌汁にザリガニは入ってないだろ？何だ、これ？」
「……すいません、出来心です。海老が食べたいなぁって思って入れたんですけど、失敗しちゃって……み、美琴さんにぜひとも海老の味を楽しんでもらおうと鍋の中に入れていたザリガニ全部入れておきましたから……ぎゃぁ！はさみがささったぁ！！」
「この馬鹿が！」
いきなり飛んできて目の近くに刺さったはさみを取って一息ついた。
「すいません、本当は龍を入れようかと思っていたんです」
「あんた、本当に龍が食べられると思っていたのかい？」
呆れたようにそう言ってくる美琴さん。え？食べれなかったのか？
「ま、まぁ……で、でも食べようと思えば食べれますよ！」
「ふん、それなら……この状況でも食べられると思うかい？」
彼女は
「はいっといで！」と叫んで扉のほうを睨んだ。そして、そこからは金髪で背の低い女の子が現れたのだった。勝気なその瞳は間違いなく俺を睨みつけている。あらまぁ、こんなお子様が俺の知り合いにいたざんしょか？
「……？」
「誰って顔をしているね……さっきの龍だよ」
「ああ、成る程……色々と熟してないからこれは食べれな……ぶへっ！！」
今、俺の顔にはきっと赤いザリガニがのめりこんでいることだろう……
「……美琴さん、この子……美琴さんの子どもですか……ぶほっ！」
「違う！さっき言ったとおり龍だ！」
「名前は？」

「名前？そりゃ、お前が決めてやるべきだろう？」
名前を俺が？こっちを見てきているとても意志の強い目……
「……じゃ、加奈で……」
「へぇ、名前をつけた理由は……まぁ、どうせお前のことだ、どうせくだらないことだろうけどな」
当たりです。ちなみに
「かみなり」という文字からとりました。てへっ♪
「じゃ、今日からあんたは加奈だ」
「ふんっ！！わかったわよ！」
俺をぎろりと睨みつけて相手はそっぽを向いた。なんともまぁ、可愛げのないがきんちょである。
「お前なんでそんなに怒ってるんだ？」
「そりゃ、いきなり殴ってこられれば誰でも怒るわよ！」
「そりゃそうだぁ……って言いたいところだが、あれは間違いなくお前が悪い。人の点数を馬鹿にするのはいけないことなんだぞ？」
された側はマジでは凹むからな。そういうことをしている皆、やめよう！
「ふん！名前を書いてなくて零点なんて……名前を書かなかったあんたが悪いんでしょ！」
「にゃんだと、このがきめ……！こ～こ～せいの苦労がお前にはわからんだけだ！」
「何よ！がきがきってさっきから言ってるけど、私は絶対あんたより年上！百年は絶対に生きてるわ！」
そういって胸をそらす加奈。……百年？それにしてはぺったんこだ。
「へっ！よく言うぜ！そんな平らな胸で背まで低い上に童顔じゃねぇか！どっからどう見てもがきだ！」
「うっさいわね！あんた、感電死決定よ！」
「やれるもんならやってみろ！」
にらみ合いを俺たちは開始したのだが、水をさした人が一人いた。

「のがっ！！」
「いたっ！！」
否、水ではなく、俺と加奈の顔にはザリガニが刺さっている。
「はい、そこで終了！加奈は今日からここで生活するように！輝には後で詳しくこのことについては話してあげるから……加奈、あんたは輝と同じ部屋で暮らしなさい」
「ええっ！こんな奴と一緒にいたら襲われる！」
「大丈夫、輝にはそんな甲斐性はないし、まぁ、間違いなく輝の趣味じゃないでしょうからね……それに、それどころじゃないだろうし……問題はある？輝？」
そういって美琴さんは俺を見てくる。
「……元はといえば、俺が悪いようですからね。俺は構いませんよ。それに襲うことはまずありません。誓ってもいいです！ぺったんだし……あいたっ！！」
ま、またザリガニのはさみが目に……目が、目がぁぁぁ！！
「一言余計！ちょっといい人だと思ったじゃない！」
「一応、いい人だ……自称いい人にはついていくなよ？危ないからな？」
「はいはい、そこまで！加奈はここの生活を熟知するように！輝はきちんと家事を教えるように！勿論、輝もきちんと仕事をするように……二人で私に対して謀反を企てたらどうなるか……覚悟しておくように！」
「「了解！！」」
俺たち二人は敬礼をして美琴さんの恐ろしい視線を受け流したのだった、
しかし、これだけでは俺の災難は終わらなかった。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：雷は昼、落ちる（後書き）

前書きで書いていたお願い一つ目……誰か、輝や加奈の絵を描いてくれる人はいないでしょうか？書いても構わないという人がいたら教えてくださると嬉しいです。さて、二つ目……以前、書いていた竜と書いてドラゴンと呼ぶ！という小説を読んだことがあるという人もメッセージ、もしくは評価をしてくれると嬉しいです。お願い事は今日だけでは終わらないと思いますので……これからもよろしくお願いします。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：他人の手は暖かい（冷え性の方の話）

二、

目の前で俺の妹を連れて父さんたちは去っていく。

「お父さん！お母さん！」

「ごめんな、輝・・・・すぐ、帰ってくるからな」

「いい子にしてるのよ？」

「いやだ！僕も一緒に行く！」

幼い俺はそれを追いかけようとしたのだが、無理だった。

その後、交通事故に巻き込まれてしまった俺の家族たちは無傷で生還したのだが、そのせいだろうか？俺はその後、預けられたじいちゃんの家にずっと住んでいる。そこでは毎晩毎晩、化け物が襲い掛かってくる夢を見ている。そう、今だって続いている……しかし、今日は誰かの手が俺の手を握ってくれている。ただ、ただそれだけのことで俺の苦しみは抑えられた。

「う、うう……うぐっ！ん？」

「だ、大丈夫！？」

目を開けてみればそこには加奈の姿が見えた。ツインテールをおろしているのでぜんぜん見た目が違う。気がつけば俺の手は必死に加奈の手を掴んでいる。

「はぁ、すまん」

「大丈夫なの？てっきり襲ってくるかと思ったけど……あんたが襲われているみたいね？」

「眠れなかったろ？やっぱり、美琴さんに頼んで部屋を変えてもらおうか？」

やれやれ、このことを美琴さんに話すのは少々気が引けるのだが（もしかしたら夢で襲ってくるのは彼女かもしれないからだ）この

家の客人となった加奈の安眠を妨げるのはよろしいとは思えない。
「う、ううん！別にいいわよ！あんたが襲われているところを見るとざまあみろって感じがするから！」
にやりと笑ってこっちを見てくる。彼女は元気を出して欲しいと俺に思っているのだろうか？それとも、俺を蹴落とそうとしているのだろうか？
俺の視線を感じたのだろうか？加奈は取り繕うように俺を見た。
「あ、あんたがどんな化け物に襲われても私が護ってあげるわ！」
「……加奈……そうか、ありがとよ……」
やれやれ、俺は何でこんながきんちょに護ってもらわねばならないのかね～お仲間が一人もいないこの状況じゃ、加奈のほうが心配だろうに……
「ほら、お子様は早く寝ないと成長しないぞ」
「何よ！せっかく人が心配してあげてるのに！」
「……わかってる、けどまぁ、悪い……もう、起こすことなんてないと思うからな……心配しないで寝て結構だぞ」
「そう、そうならいいんだけど……」
「悪いな」
俺はそういって加奈に
「おやすみ」と告げると目を閉じたのだった。不思議と、その後はあの夢を見なかった。普段だったら二度寝しても同じ夢を見てしまう。しかし、今日は違っていた。

「なるほど、これなら悪夢も見ないか……」
俺の手にはしっかりと加奈の手が握られていた。俺は加奈の隣で寝ていたというわけだ。
「す～……す～……」
やれやれ、本当に俺は何をしているのだろうか？
「ほら、朝だぞ加奈！」
日光が顔に当たっているだろうに、まったく起きない加奈のほっ

ぺたを引っ張って起こしてやろうとしたのだが……
「ぎしゃ〜！！」
「ぐはっ！！」
俺の手に噛み付いてきやがった！？な、なんと言う奴だ！
「うまい〜」
「うまい！？そんなに俺の手はうまいのかっ！？」
「ほらほら、何を朝から騒いでいるんだい？」
美琴さんがやってきた。既に着替えて手にはフライパンが握られている。
「すいません、起きるのが遅くて……」
「……なんか、夜中騒いでいたけど加奈のせいか？」
どうやら、声を聞かれていたようである。
「い、いえ……」
「そうかい、いい加減、夜中になんで騒いでいるのか教えてもらいたいんだけど？」
「そ、その……後一回、チャンスをください……それで、次、叫んだ場合は正直に話します」
「そうかい、それなら仕方がない……ほら、さっさと加奈を起こしてつれてきな！」
美琴さんが去って言った後、俺は手に噛み付いている加奈をぶら下げたまま、ため息をついたのだった。

「さて、今日は休みだ……無論、それはお前たちが休みであって私は仕事だ。泰助は既に仕事に行っている……輝、今日は何をしないといけない？」
「ええっと、食事を作ったり家事をしたりですか？ああ、あとはいつものように修行ですね？」
「確かに、それもだが今日は加奈にこの町を案内してやれ」
「俺がですか！？」
「そう、お前だ！……もしかして嫌なのか？」

そういって怪訝な表情をしてくる美琴さんに俺は首を縦にせざる終えなかった。
「……わかりました。その前に……一ついいですか？」
「ああ、いいぞ」
「ここの地形は未だに入り組んでいるんで……俺、迷う可能性があるんですけど？」
「ああ、そういえば輝は方向音痴だったな」
「なるほど、だから渋ってたのね？」
二人から馬鹿にしたような表情をされるのだが、事実は隠していても事実だ。いまさら暴露するのは非常に恥ずかしいのだがしょうがない。
「迷わないように気をつけますよ」
「よしよし……いいか、加奈。絶対に輝の手を離すなよ？離したらお前は迷子だ。太って眼鏡かけた見た目が危なそうな連中はお前のような存在を欲している可能性が非常に高い」
「何でよ？」
俺に不思議そうに聞いているのだが、俺も不思議だ。これには首を傾げるしかない。
「まぁ、そういうのが世の決まりというものだ！じゃ、私は仕事があるからな！きちんと夕食の準備もしておくように！ああ、きちんとティッシュとハンカチを忘れるなよ！」
そういって美琴さんは姿を消してしまったのだった。

二人して町を散策している。周りからはきっと兄妹に見られていることに間違いないだろう。
「この町に住んでいるんでしょ？何で道を知らないのよ？」
「失敬な！きちんと学校への道とスーパーや商店街に行く道、そして、マラソンする道……ああ、これは山の中だった。とりあえず、少しぐらいなら知っているんだぞ？」
「それなら、その手に持っている地図を離しなさいよ？」

加奈は俺の言うことはあまり聞かないのだが美琴さんの言うことは聞くらしい。きちんと俺の手を掴んで離してはくれないのだ。
「嫌だ。これを離したら間違いなく、遭難する」
「ありえないわよ！」
睨み付けてくるのだが、何をされようが俺は絶対にこの手を離さない！そういえば、手で思い出したのだが朝のことをまだお礼をいっていなかったな。
休日でいつもより人通りが多い道を歩きながら俺は加奈に礼を述べることにした。まぁ、何かをしてもらった相手にはきちんとお礼をするように幼少の頃より叩き込まれている俺はお礼をしないと気持ちが悪くてしょうがない。たとえ、それが小さい人だったとしてもだ。
「加奈、そういえば……夢のこと、ありがとな……あの後、手を握ってくれたんだろ？」
「何言っているの？あ、あれはねぇ～……あんたが勝手に私の手を握ってきただけよ？」
「そうなのか？」
「そ、そうよ！け、決して私から握ったわけじゃないからね！お、お礼なんかけ、結構だから！」
ま、まぁ……お礼はいえたからこれでいいかな？しかし、なんだか納得がいかないので俺はちょっとしたプレゼントをすることにした。

「ここ、どこ？」
「デザートの食べ放題。お前がどのくらい食べるかわからんし、好みがわからん。好きなだけ食べろ。ただし、絶対に残すなよ？」
追加料金を取られてしまうからななぁ……バイキングの意味を教えたところきちんと納得したのか、お皿を持って去っていった。
俺は席に座ってコーヒーを飲むことにした。
バイキング終了時刻、俺は店員さんの

「二度と来ないでくれ！」という顔を後にしていそいそとその場を後にしたのだった。俺は店に迷惑を掛けてしまってモンブランを四つほどかって帰ることにした。
「……しっかしまぁ、予想以上に良く食うな？」
幸せそうな顔をしている加奈に俺は首をかしげる。先ほどの量がこの体のどこに消えてしまったのだろうか？
「むぅ～あんたが好きなだけ食べていいって言ったじゃない！」
「いや、別に非難しているわけじゃなくて、どっちかというと褒めてるほうな」
「え、そうなの？ま、まぁ……私にかかればこんなものよ♪」
ものすごく単純明快なお子様思考である。まぁ、このくらいにしていいだろう……
「さ、そろそろ帰るぞ。家に帰って夕食の準備をせねばならん」
「そうなの？どこにももう寄らないの？」
「ん～どうかな～あと、今日寄るところは……スーパーぐらいか？」
「夕食の材料買うの？今日の晩御飯は？」
本当に幸せな奴である。
「……さぁなぁ、何にしようか……」
ケーキを食べている間に考える予定だったのだが、加奈の食べっぷりを見ているとすべてのことが頭から外れてしまったのが誤算だったな。無駄な時間を過ごしてしまった。まぁ、幸せそうな顔をしていたから別にいいかもしれん。
「まだ決まってないなら私、ケーキがいいなぁ～」
「却下……お前なぁ、ケーキは夕食じゃないぞ？あと、あの家じゃ洋風のものは禁止！」
「……じゃ、みたらし団子？」
「……そういう問題じゃなくて……今日の晩御飯！ザリガニ味噌汁は駄目だぞ？昨日不評だったからな？」
本当に困ったものである。少しの間創作料理はやめておこう。俺

たちの寿命が短くなってしまう可能性が非常に高い。
「ん～私は何でもいいや」
「それが一番困るんだよな～」
考える側としてはどうでもいいという考えが一番困る。的確なアドバイスをしてもらわないと……
「しょうがない、今日は親子丼にするか……」
困ったときは大体、親子丼となってしまう。卵は完全に分解されるには一週間ほど時間がかかると聞いたのだが……本当だろうか？
それはさておき、俺たち二人はスーパーへとやってきた。
「あら、輝君……妹さん？」
「ま、まぁ……そんなもんです」
「む！私はあんたの妹じゃないぞ！」
レジには知り合いのおばさんがいて俺たち二人を見て驚いている。それはそうだろう。普段だったら一人出来ているのに脇には俺より頭が一つ分ちんまい女の子がいるからだ。彼女かと聞かれなくて本当によかった。
「じゃ、彼女？」
「違います。ええっと、美琴さんの家で預かっている女の子です。俺の妹分ってところですかね」
「そうなの？けど、妹さんだと思うわぁ……どことなく、雰囲気が似てるもの！」
俺と加奈はお互いの顔を見て首を傾げるしかなかった。まったく、どこが似ているというのだろうか？
「美琴さんによろしくね？」
「ええ、わかりました」
帰り道、気がつけば夕日が沈みかけていた。なんだか、今日は精神的に疲れた。
「なんか疲れているみたいね？荷物、もってあげようか？」
「いや、いい……別に疲れてないから」
「何よ！せっかく人が親切で持ってあげようとしてあげたのに！」

「加奈に渡すと卵を割る恐れがあるからな……」
「割らないわよ！」
睨み付けてくるのだが、まぁ、所詮は子どもだ。別に怖くともなんともない。
「それより、手を離すなよ？離したら、明日になるまで俺が探さないといけないからな」
「……わかってるわよ」
加奈はそういって俺の手をしっかりと握ってきたのだった。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：魚が釣れたらテイクアウト！

三、

「暇だな……」

休日二日目、俺は家でごろんとしていた。加奈と美琴さんは加奈の生活用品（下着など）を買いに出てしまい、泰助さんは仕事である……気のせいか、泰助さんが休みの日なんてないような気がする。

「ま、暇なら散歩でもするか」

俺は立ち上がって体を動かすと玄関へと向かって歩き出した。

暇なときは体を動かすのが一番なのだろう。あんまり体を動かすと色々と後で面倒なことになってしまうのだが……暇なものはしょうがない。

川を通る途中、俺は一人のおじいさんが釣竿を垂らしているのを見つけた。

「おや、輝君じゃないか？」

「こんにちは」

この人は俺の知り合いで、じいちゃんの友達で名前はサムさん。名前は外国人みたいだがれっきとした日本人らしい。見た目は七十ほどだと思うのだが、実年齢は教えてくれなかった。

「……今日はいつものようにさんぽかい？」

「ええ、まぁ……そんなもんですけど……サムさんは釣りですか？」

「ああ、そうだよ……ところで、えさが切れたんだ……悪いけど、わしが戻ってくる間ちょっと釣竿を見ていてくれないかね？さっき、とても大きな魚の影が見えたんだ」

「へぇ、そうなんですか？わかりました」

おかしいな、ここの川にはそんなに大きな魚はいないような気がするのだが……

とりあえず、俺はサムさんが戻ってくる間釣竿を見ておくことにした。
「じゃ、よろしくたのむぞぃ……お前さんが大きな魚をつったらお前さんにいいものをやろう」
「ええ、わかりました……」
小さくなっていくサムさんの後姿を眺めて、完全に消えたところで釣竿のほうに視線を向ける。
「あ、きたっ！これはラッキーだな！」
サムさんがいなくなってすぐに手ごたえを感じた。
「うぉぉぉ！？」
思い切り握っているのに俺を川に落とし込もうとしているのか……とりあえず、めちゃくちゃ大きい魚が引っかかったようだ。
「ぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！逃がしてなるものか！」
俺は持てる力すべてを発揮して、相手が緩んだ隙に一気に引っ張り上げる！
「……」
「ぎしゃぁぁぁぁぁぁ！！！」
目の前に広がるものは真っ赤な口蓋だった。

「お～い、輝！」
「……じ、じいちゃん！？生き返ったのか？」
「ほっほっほ！やられてしまったのか？」
「え？やられたって？」
「お前さん、死んどるぞ？今のお前さんの本体、モザイク決定画像ナンバー1じゃな……しっかしまぁ、あの程度の青尻娘にやられるとは……嘆かわしいぞ？最近、緩みすぎじゃないのか？」
「……やっぱ、そう思う？」
「うむ、ここから見ていたが最近のお前さん、駄目駄目……力は目覚めてきよったようじゃが、肝心な部分が甘すぎ！あの程度の龍

にやられるなど言語道断じゃ！」
「で、でもさぁ……普通、魚釣りをしていて龍がつれるなんておもわねぇよ？」
「じゃ、お前さんは帰り道を普通に歩いていたらいきなり雷が落ちてきて龍がいないと否定できるか？」
「……」
「もっぺん、いってこんかぁ！！」

「うぉぉぉぉ！！！こんなところで負けてたまるかぁぁぁぁぁぁ！！！」
「ぐるる！」
「ったく、こんなところで死んでられるかっての！」
再び相対する龍。しかし、今回の相手は深蒼色で、落ち着き払っている。その目に俺はどのように映っているのか……きっと、餌にしか思っていないのだろう。目がぐるんぐるんなっているところを見るとちょっと薬をやっているような印象を受ける。
「さぁて！今日こそ龍鍋だな！」
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
とりあえず、俺は相手との距離をつめるとこめかみ辺りを狙って一撃を繰り出す。相手はそれを承知しているのか、すばやくそれを交わして長い体で俺を倒そうとしてくる。それを避け、上からのしかかって相手を殴って、橋から川に落とす。
「はぁ……はぁ……どうだ？」
どの程度の効果があったかよくわからないのだが……あのラリっている龍を倒すことが出来たのだろうか？
俺は気になって橋の上から下に落とした龍を探したのだが……
「う、嘘！？」
橋の下には一人の人間が顔を下にして浮かんでいた。

あわてて下に降りて濡れることも構わずに川に入ってその人物を助ける。
「だ、大丈夫か？」
「いや、正直マジで天国が見えたっす……」
その人物は目をぐるぐるまわしながらも死んではいなかった。よかった、人工呼吸とかしなくて……俺はその人をとりあえず家につれて帰ることにしたのだった。
深い蒼色のワンピースを着ているその人は女性のようだ。俺より、歳が一、二歳ほど上のように見える。髪は長めで濡れてしまっているので服にべっとりとついている。
「……いやぁ、しっかし……助けてくれた挙句に食べ物まで用意してくれるとは嬉しいっすね～」
猫のような目をした人物はこの家が珍しいのか先ほどからきょろきょろとしている。
「……もしかしてとは思うが……あんた、龍か？」
「そうっすよ？それがどうかしたっすか？」
とても変わったしゃべり方をしていて俺の知り合いにもこんなしゃべり方をする人がいるのだが……聞きなれない。
「名前は？」
「名前っすか？ないっすよ？あんたが決めてくれると非常に嬉しいんすけど？」
ニコニコしながらそう言ってくるあいてに対して俺は……さて、どうしたものだろうか？加奈のときは適当に決めてしまったし、見た目外国人の娘に加奈というバリバリ日本人の名前をつけるのはどうかといまさらながら思う。目の前の人物も深い蒼色の髪の毛をしていて非常に悩む。ええい、こういうときこそいんすぴれ～しょんを大切にするべきだ！直感で決める！
「……じゃ、南海（みなみ）でどうだ？」
「ん～かまわないっすよ？あんた、結構いいネーミングセンスをしてるっすねぇ～」

すまん、南海よ……水波が原語だ！
「じゃ、これからよろしくお願いするっす」
「え！？」
「え！？ってあんた、私に名前をつけたっていうのに見捨てるっすか？ううっ……白状ものっす！私の体の奥まで入ってきたくせに！」
「人聞きの悪い言い方をするな！お前が俺を消化しようとしていたんだろうがぁぁぁ！」
「あんまりっす！！うわ～ん！」
泣き出した相手に俺は今度は慰めに入るしかなかった。
「あ～ほらほら、泣くな！」
「嫌っす！泣くっす！ここにいていいよって言ってくれるまで嫌っす！」
「ちょっと待て、とりあえず、泣き止め……」
相手をなだめて立たせて俺は頭の中でどういうか考えてみた。
「いいか、俺は残念ながら居候のみだから俺の許可じゃなくて美琴さんの許可が要るんだ。とりあえず、聞いてみるからな？」
そこへ、加奈の
「ただいま！」という声が聞こえてきた。
「やばい！」
「え、何がっすか？」
「と、とりあえず隠れてくれ！」
「わわっ！そんなに押すと……」

「で、何をしていてこうなったわけ？」
俺の頭には大きなたんこぶが出来ており、近くには
「鋼鉄大根」と書かれていた大根の無残な姿（木っ端微塵）が確認できる。
「……いえ、その、南海さんを加奈から隠そうと思いまして、勢

いあまって押し倒してしまっただけです」
ものすごく俺を睨みつけながら加奈は続ける。
「……その人、あんたの友達？」
「違う……知り合い。しかも、お前のほうが友達なんじゃないか？」
「え？」
「その人、龍だ」
ぎょっとして加奈がニコニコしている南海のほうを見る。
「あ、あんた……龍なの？」
「そうっすよ？あれ？加奈ちゃんも龍何すか？妹さんなんでしょ？」
「違うぞ、南海。こいつはお前の友達であろう、龍だ」
そういって俺はきょとんとしている加奈に事情を詳しく説明した。
「……そ、そんな……龍ってみんな、ぺ、ぺったんこだと思っていたのに……何、この差？これが格差社会って奴！？」
「子どもだからっす！これが大人と子どもの差っすよ！」
「お～い、何を言っているんだ？」
絶望感に打ちひしがれているであろう加奈の顔を見るのは初めてなのだが……それはさておき、これからどうしたものだろうか？
「なぁ、加奈……格差……美琴さんはどうしたんだ？」
「格差……格差……」
駄目だな、これは……
「輝、呼んだか？」
何故か冷蔵庫から姿を現した美琴さんにぎょっとなったのだが……この人には常識というものが通用しないのだろう。
「すいません、また、龍をつれてきちゃいました」
「……まったく持って進歩のないことこの上ないな……名前は？」
俺が答えようとすると南海が立ち上がる。
「名前は南海っす！これからよろしくっす！」
「ま、好きにするがいいさ」

あまり興味を持っていないのかそんなことを言って首をすくめる。
「さて、そんなことより夕飯の準備だ！輝、今日はぶり大根にしてくれ」
「うわぁ、それ、いいっすねぇ～」
「格差……格差……」

飯も食べ終わってお風呂の時間となった。俺は大体五分ほどで風呂から上がるのだが、その前に走ってくることにしている。
玄関へと向かう途中、頭にタオルなどを乗っけてのほほーんと歩いている南海にであった。
「あれ？輝君ははいらないんすか？」
「まぁな……後ではいる。これからちょっと体を動かしてくるんだ」
「感心するっすねぇ～……お供したほうがいいっすか？」
「いや、いい……それより、加奈の世話でもしてやってくれ」
「かしこまりましたっす……っていたいっすけど、加奈さん私と一緒にお風呂に入るのが嫌らしいっす！」
「そうか……」
きっと、格差がどうとかという奴だろう……まぁ、厳しい現実を見ないと人は成長しないからな……
「じゃ、行ってくる」
「いってらっしゃいっす♪」
俺は玄関を出て裏山へと向かって歩き出したのだった。徐々にスピードを上げることにしている。しかし、今日は後ろから俺を引き止める存在があった。
「ちょ、ちょっと待って欲しいっす！！」
「南海か……どうした？」
「その、替えの下着を買うことになったっすからついていくっす！」
「そうかい、それなら勝手にしてくれ」

考えてみればそうだろう……今日はもうゆっくりしていたかったのだがまだまだ人波乱がありそうであると俺は思って南海と共に走り出した。

感じていた通り、俺は厄介ごとに巻き込まれることになった。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：木の初恋ははかないものだ

四、

俺の目の前にとても大きな木があった。

「……ま、今日はここまでかな？」

「終わりっすか？」

さすがに全力疾走とはいかないし、微妙にまだ走ったほうがいいという気持ちもないでもないが、本日はこのくらいにしておかないとなんだか、いけないような気がしたのだ。

「この木、おおきいっすねぇ～」

「ああ、だけど……まだ、これより大きい……というより、歳をとっている木があるって俺は聞いてるな」

俺は木に触ってみた。

『おいおい、どこ触ってんだ？坊主？』

「……南海、なんかしゃべったか？」

首をプルプルと振る南海。

「じゃ、だれ？」

『目の前にいる我だ』

「……いやぁ、てっきり木がしゃべったのかと思ったぜ……さぁ、下着を買いに行こうか、南海？」

「そうですね、そうしましょうか？」

いやぁ、今日はやっぱり疲れているんだろうなぁ……木がしゃべっているように聞こえたぜ～

『待てというのが聞こえてねぇのかよ！』

「うおおっ？」

「うわっす！！」

地面からいきなり根っこが生えてきて俺たち二人を捕まえる。

「な、何じゃこりゃ？」

「根っこっすよ？見てわからないっすか？」

「そりゃ、わかる！」
「じゃ、何で聞いてきたんすか？」
「……もういい、お前と話したくない……」
「？」
根っこを引きちぎろうとしたのだが、そううまく引きちぎれてはくれないようだった。
「やれやれ、これは一体全体、何なんだよ？」
抜け出そうにも抜け出せない……
『無理だ。これは我が解かねば取れることはない』
「南海、また何かしゃべったか……いたたたった！わかった！わかった！世の中にはしゃべるも木もいるって！認める！認めるから！」
『うむ、わかったようだな』
何とかおろしてもらって隣の南海を見る。こちらはきょとんとしている。
「木ってしゃべるんっすね？」
「そうだな、しゃべる木もいるんだな……ところで、俺たちに何か用か？」
木がしゃべることなんてめったにないし、テレビに送ろうと一瞬だけ考えたのだがやめておこう。
『うむ、重大なことをやってもらいたい』
「何を？」
『三丁目の山田さんの家で自家栽培されているプチトマトのみっちゃんにこの恋文を届けて欲しいのだ』
そういって手渡されたのは葉っぱだった。
「……悪いが、俺たちは郵便屋さんじゃねぇんだ……郵便番号と住所かいて自分でポストに出してくれや……これから用事だってこっちにあることだし……」
「手紙をやるぐらいならいいんじゃないんすか？」
「駄目だ、面倒だからな」

そういって相手に背中を見せると相手が再び根っこで襲い掛かってくる。しかし、今度は完璧に避けることが出来た。
『……頼む！もう、もう、みっちゃんは長くないんだ！』
「……長くないって、どういうことだよ？そんなにプチトマトは長生きじゃねぇだろ？もしかして、そのプチトマトはお前さんよりも年上か？そりゃ、珍しいよぼよぼなんだろうな？」
『違うぞ！みっちゃんは絶好調の赤色で張りだってよくてみずみずしいんだ！生葉のＣＭに出ている熟れすぎたトマトのようじゃないぞ！』
「……ああ、そうかい」
『この通り！頭も下げるから！』

ぼきぼきぼきぃ！！

「うわぁぁぁあ！！折れてるっす！このままいくとつぶされちゃうっすよ！！」
「わかった！わかった！俺たちがきちんと渡してくるから！ストップ！」
『おお、そうか……それはありがたい……』
「じゃ、行くか南海」
「了解っす！」
こうして、俺たちは葉っぱを持ってその場を後にしたのだった。

「で、話はわかったけど何で私が行かないと行けないのよ！へ、へくしゅん！」
「まぁ、旅は道連れ世は情けだからな」
「厄介ごとを持ってこないでよ！」
「それ、言っちゃうと私たちのことを全否定になっちゃうっすよ？どう考えても、私たちは厄介ごとそのまんまっすからね。加奈さん、初対面の私が見ても騒がしいっておもうっすからね」

そういわれて完璧に加奈は完璧に固まってしまった。
「……あ、あんたはそう思う？」
「ん？まぁ、騒がしくなって俺は嬉しいぞ？加奈は元気がいいからな」
「そ、そうよね？べ、別に騒がしてもいいわよね？胸も小さくてもいいわよね？ね？」
物凄い剣幕でそう言ってくる……な、何だ？普段の加奈よりも怖いぞ？
「あ、ああ……まぁ、外見だけじゃ人は語れないからな」
「そ、そうよね！」
「けど、加奈さんって中身も悪いと思うっす！」
「ああ、それは一理あるなぁ……」
「……南海って言ったかしら？私に何かうらみでもあるの？」
「いや、ないっすよ？事実を言ったまでっす」
きょとんとしているところをみると本当に事実なのだろう。加奈は犬歯をむき出して怒り狂っている。
「もう！ただじゃおかないわよ！今日お昼に出来るようになったことをここで試してあげるわ！へ～んし～ん！！」
雷がいきなり現れて加奈に当たる。地面が揺れ、雷雲が立ち込めてゆく……
俺たちは恐怖を感じながらその姿を見ていた。
「へ～正義の味方みたいに加奈って変身できるんだなぁ……ま、加奈が変身してもちょっと無理あるだろうな」
「何になるんすかね～……まぁ、大体わかるきもするんすけどね～」

しゃ～～

「って、龍かよ？それって変身っていうより戻ってないかな？」

「そうっすね、変身じゃないっすよね～……まぁ、期待通りで私はちょっとがっくりっす」
「おっと、無駄なことにちょっと時間をとられすぎたな……さ、行くか南海？お～い、加奈、それどうやって戻るんだ？」
首をかしげる加奈。
「……ま、今回は自業自得ということで……」
「まぁ、しょうがないっすよ」
「ばれないように家に帰っておくんだぞ？」

ようやく、目の前に三丁目の山田さん家が現れる。
「しかし……どうやって渡せばいいんだ？」
「そうっすね、このままはいっても不法侵入で逮捕されてしまうっす」
さてさて、どうしたものだろうか？
「とりあえず、家の周りをうろうろしてばれないようなところからはいるか？」
「そうっすね……でも、この時点で私たち不審者確定っすね？」
「……深くは考えないようにしよう……よし、南海は左から行ってくれ、俺は右から行くから」
「了解っす！！」
こうして、俺たちは二手に分かれて行動を開始したのだった。

「お母さん、誰か家の周りをうろついているみたいだよ？また泥棒さんかな？」
「……大丈夫よ、この前の泥棒に侵入されたから防犯面は大丈夫だからね」

「なぁ、南海、どこか進入口はあったか？」
「いや、ないっすね……こうなったら適当に葉っぱを放り投げてそれで終了でいいんじゃないんすか？」
「それじゃ駄目だろ？いいか、約束しちまったものは最後までするべきだからな」
「……変なところで律儀なんすね～」
呆れたような仕草をしている南海は放っておくことにして、さて、こうなったら……
「よっと！」
「ああっ！不法侵入っすよ！」
「すぐに出るって！」
『侵入者確認！』
目の前にいきなり現れる赤外線つきの物体。
「なんじゃ、こりゃ？……って、のわぁああ！！」
いきなり右腕を振り落として俺を叩き潰そうとする。闇夜に阻まれてその姿を完璧に捉えることはできない。
俺はもといた道路に戻った。
「ありゃ、一体全体……」
「またくるっす！」
その場から離れると、ようやく月明かりに照らされてその姿が確認できるようになった。
それは、機械だった。無骨な人型をしていて、顔にはどらやきが大好きなロボットのお面がつけられていてそのアンバランスさが独特の雰囲気を作り出している。
「ありゃ、まぁ……」
「……ここから離れれば攻撃を中止する……」
「輝君、どうします？」
南海は俺に指示を求めている。今日あったばかりだがどうやら、俺の言うことを優先してくれるようだ。ロボットはあんなことを言ってくれているが……

「勿論、約束を果たす！」
「そうっすよね？じゃ、私がおとりになるっすからその隙に手紙を置いてくるっす！じゃ、木の下で会うことにするっす！！ほら、こっちっすよ！ポンコツ！」
「……むかぁ……」
あっという間に姿を消してしまった南海。そして、その後に続く謎の機械……あれ？離れたら攻撃を停止するって言ってなかったっけ？
「まぁ、いいか……」
俺は立ち上がってこっそりと進入したのだった。

俺は何とか手紙を渡し終えて木のところへもどってきた。
「いや、二体目がいるとは思わなかった……」
二体目はコロッケ大好きな武者型？ロボットのお面だった……
「おかえりっす！」
『きちんと置いてきてくれたようだな……ありがとう』
「いやいや、いいって……さて、南海、帰るか？」
「そうっすね」
いいことをした後は非常に気持ちがいいことを俺は久しぶりに体感した。まぁ、たまにはこういうこともいいのかもしれないな……
……こうして、俺たちは帰ったのだった。
ちなみに、余談なのだが……
「ママ、あの泥棒さん何もとらなかったね？」
「そうね……野菜泥棒だったのかしら……あら？」
「どうしたの？」
「ここのプチトマト……全部つぶれてるわ……」
「プチトマトだけにプチッとまとまってつぶれてるね？」
「そうね、まぁ、しょうがないわね～」
ということになってしまったそうだ。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：固き決意（前編）

五、

「はぁ～」

大型連休の初日、俺はお空を見上げながら一人でため息製造機になっていた。

「どうしたの、輝？」

俺の隣に加奈がやってきた。

「いや、雨だからさ……」

「何よ？別に雨ぐらいでしょげなくてもいいじゃない？」

「そうっすよ、輝君？」

反対側には南海がいる。

「ああ、二人には何も言ってなかったな……今日、俺の師匠が家にくるんだ」

「師匠？ああ、体術を教えてくれる師匠ね？けど、それって美琴さんじゃないの？」

「普段は美琴さんが教えてくれてるようっすけど？」

二人が疑問に思うのもそうだろう。基本的には美琴さんが俺に体術を教えてくれてはいるのだが……

「雨の日にだけ、雨宿りしにこの家にくるんだ」

ぴんぽーん！

「……いいか、絶対に二人とも失礼がないようにしろよ？……できれば、師匠の目の前に連れて行きたくないんだが……まぁ、二人を信じることにしよう」

「それってどっちかというとあきらめの表れよね？」

「ひどいっすねぇ～」

俺は文句たらたらの二人を残してその場を後にしたのだった。

「はーい、今あけます！」
玄関を開けた先にいるのは俺の師匠であるアマヤドリ師匠である。銀髪に蒼い目……
「え、わ、私と同じ背丈じゃない！」
「うわ、加奈！さっき言ったばかりだろ！」
「……ほう、龍か……」
師匠は指をぱちんと鳴らすと俺を天上に貼り付けにした。なにやら目に見えない力が俺を縛り付けているようだ……
「あの～？」
「輝よ……お前が元凶のようだな？」
「いえ、まったく持って誤解です」
「……師匠にそのような口を……この小娘の責任、どうとってくれよう？」
物凄い睨み付け（一般的にはほっぺたを膨らませてこっちを見ているだけだ）だが……いや、既に何も考え付かん……さて、これからどうしましょうか、いや、俺はどうなるのでしょうか？……
……この前はプリンを勝手に食べただけで池に沈められたっけな……
「へぇ、なんだか物凄く強そうな師匠っすね？いろんな意味で意味不明っすね」
南海は俺を見ながら呟く。うん、その考えは非常に正しい。
俺をおろすことなく、師匠は加奈を見る。加奈もその視線を感じているのか……睨みつける。おお、なんともまぁ……勇気ある人物だ……
「何よ？」
「……まぁ、ちょっと口が悪いな？輝、どういった教育をしているんだ？ひねくれた性格しているじゃないか？どういう生活させているんだ？」
「まぁその、ええっと、早寝早起き、家事は今のところ料理を任せてます。厳しく育てて……おおっと！」
いきなり俺を縛り付けていた力が俺を解放した。いやぁ、もうち

ょっとで間抜けな体制になるところだった。
「……ちょっと優しくしてやればいいだろう？」
「え、ええっと……おっしゃるとおりです」
「本人はなぁ、こういうことがしたいと思っているんだぞ？」
師匠はきょとんとしていた加奈を指差すと俺のほうに持ってきた。
「え？な、何で？」
加奈はぴったりと俺に張り付いてはなれない。
「輝、頭を撫でてやれ」
「りょ、了解しました……」
俺はきょとんとしている加奈の頭を撫でてやった。
「いいこいいこ……」
「や、やめなさいよ！」
加奈は顔を真っ赤にして嫌がっている。
「ほら、次は抱きしめてやれ」
「ええっ！？それは無理っすってうわぁぁ！！」
俺は加奈を抱きしめていた。師匠の目は金色に輝いている……
「うわ、すごいっすね……加奈さん、もう顔がトマト並みに真っ赤っすよ……けど、うれしそうっすね？」
「……う、うるさいわね！」
「嬉しいってことは否定しないんっすね？」
「……」
「とほほ……なんで俺が……」
「輝、以後、きちんと何かあったら抱きしめてやるように」
「……了解しました」

加奈は何故か俺の足の上に乗っており……師匠は目の前でお茶を飲んでいる。南海は俺のとなりに引っ付いている。
「……あの、今日はどういったことを教えてくれるんでしょうか？」

「美琴はいないのかい？」
「ええ、今日は仕事だそうで……」
「ふぅん、そうかい……」
そういってお茶をずずっとすするとこっちを見てくる。
「龍を大切にしろよ？」
「ええ、わかってます」
「わかってるなら、その二人を抱きしめることが出来るよな？」
「……」
俺は黙ってしまった。
「大丈夫よな？」
「ひっ！」
気がつけば目の前に師匠の顔があった。
「は、はひ！」
「じゃ、やれ」
「ええと、そんなことより……今日は何を教えてくれるんですか？」
「ああ？そりゃ、抱きしめ方だ」
「……」
あれ？師匠って体術の師匠のはずだったような……
「ほら、そこの龍も抱きしめろよ？」
「あ、は、はい……二人とも、すまん！」
目をつぶってそのまま二人を抱きしめる……
「あ、輝……」
「ま、まだ知って間もない二人が……あわわっす！」
「こ、これでいいでしょうか？」
「ああ、結構だ……さて、余興はその程度にして今日はお前たちにちょっとした旅行にいってもらおうと思ってここにきた」
それならそうと早めに言ってもらいたい。余興なんていいからさ……
「へぇ、旅行ねぇ？」

「すごいっすね！」
加奈と南海は喜んでいるようだが……この師匠のことだ。どうせよからぬことを考えていることに違いない。
「じゃ、準備してくるわ」
「ええと、山っすか？それとも海……」
「山だ」
「山っすか！じゃ、虫取り網が必要っす！！」
「はぁ……やれやれ」
あっという間にこの場からいなくなってしまった二人を尻目に俺はお茶を静かに飲んでいる師匠のほうを見た。
「どうせ、何か裏があるんでしょう？」
「ああ、この前はお前一人じゃ手に負えなかったからな」
「あの時は正直、死ぬかと思いましたよ？」
「そうだろうな、鬼の相手は一人じゃ無理だ」
この前はマジで死ぬかと思った……俺は妖怪などいないと信じているのだが……鬼の存在は信じた。金棒が目前にまで迫ったときは小さいときにいじめていた子猫にあやまってったっけな？
「で、今回は誰が相手なんですか？」
「さあな。とりあえず言えることは今回は龍が二匹もいるんだ。どうにかなるだろ？」
「……信じていいんでしょうか？」
「ああ、大丈夫だ。あの二人の実力ならばな……ああ、今日中に行けよ？」
師匠は立ち上がって俺に地図を渡すと消えてしまった。
「やれやれ、師匠は一体全体……何者なんだろ？」
いや、考えるのは無駄なことだろう。あの人は一応、人間ってことにしておくしかないだろうな。
俺はそうすることにして準備をするために部屋へと引っ込んだのだった。無論、置手紙をおくことも忘れてはいない。

「ここが辰乙史村ね！」
「田舎っすねぇ～」
俺たちの目の前に現れたのは今回の旅の目的地である辰乙史村である。下調べなどまったくしてきていないのでわからないのだが……いけばわかるといわれてやってきた。
「お、あんたたちがアマヤドリ様の使者かね？」
村に足を踏み入れると一人の老人がやってきた。その老人は杖を手にしてまるで千人のような姿をしている。腰は見事に曲がっているのだが……まだまだ死にそうにはない。
「ええ、そうです」
「そうか、やはりアマヤドリ様の使者か……さ、こちらに来てくだされ」
俺たちは村長を先頭にして歩き始めた。
村の中は本当に静かで、村人がいるのかどうかさえ、わからない。生活の跡は残っているような気がするのだが……長らく、この村には人がいないような気がしない。
「……あのアマヤドリって一体全体、何者なのかしら？」
「そうっすね、おかしい人だとは思いましたが……」
二人して悩んでいるようなのだが……
「二人とも、気にするな。あの人物について考えたって時間の無駄だ」
「そんなもんなの？」
「ああ、一度正体を確かめてやろうとしたら……気がついたら全裸で池に浮かんでいたよ」
「……そりゃ、すごいっすね……」
「さ、つきましたぞ」
師匠について話していたら時間が経ってしまった……おかげで、村を見るチャンスを失ってしまった……ああ、やっぱり師匠のことを考えるなんて時間の無駄だったな。

「で、この社は何ですか？」
「ここにお通しするように言われておりますのじゃ」
目の前に広がるのはぼろい建物だ。
「とりあえず、中は綺麗ですので……どうぞ、お入り下さい……この村をお願いしますじゃ！」
「え？」
既に二人は社の中に入っていて、この場には俺しかいなかった。なんだかおじいさんが変なことを言ったので聞き返そうとしておじいさんのほうを見ると……
おじいさんは曲がっていたはずの腰を綺麗に伸ばして
「とうっ！」といって姿を消した。
「……な、なんだ？」
「輝～早く来なさいよ～」
「本当に中は綺麗っすよ！」
「……」
う～ん、この世界にはまだまだ謎の現象が多いのだな……まぁ、さっきのは幻覚ということにしてさっさと中に入るとするか……
社の中は本当に綺麗だった。
「で、何かあったか？」
「え？ああ、これね？」
加奈が俺に手渡してくれたものは手紙で、俺はそれをさっさと開く。
「やれやれ……また、このパターンか……」
「どういう意味？」
俺は手紙を開けて加奈に見せる。
そこには
「勝負は明日の晩　生贄に扮し　主を倒せ！」と書かれていた。

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：固い決意（後編）

六、

空には暗雲が垂れ込み、遠くでは雷雲が鳴り響いている……うう
ん、山の天気は変わりやすいってよく言うけど本当なんだな……
…俺はそんなことを思いながら神妙な面持ちの二人の顔を見た。
しばしば、二人の表情を見てから紙に書かれていることについて、
俺たちは話し合った。一ヶ月前のカレンダーは変な絵が描かれてい
る。

「……ええっと、生贄か……」

今回の会議について俺は真剣に考えているつもりだ。

「そうね、生贄になって隙を突いて主を倒せってことなんでしょう
ね？」

加奈も真剣に考えているのだろう……

「生贄……っすか……」

そして、南海も一緒に考えてくれている……

「「「じゃ、生贄役はじゃんけんで決めよう！！！」」」

こうして『第一回生贄決定選手権』が開催された。

白い棺の中に入っているのは加奈である。

「ちょっと！なんで！」

「いや、じゃんけんに負けたのは加奈だからな～」

「いやぁ、ま、生贄っていうのは加奈さんみたいなぴちぴちの人が
良くやるもんっす」

俺たち二人は棺に納まっている加奈に手を振った。顔の部分は一
応空けておくが、黙っておくように指示をしたところ素直に従って
くれた。

「……お話のところすいませんが……」

そこへ、あの老人がやってきた。
「何です？」
「ええっと、生贄にはもう一人必要なのですが……」
そして、どこから出したのか知らないが……白い棺を出してきた。
「え！それなら仕切り直しね！」
がばりと起き上がって加奈はそんなことを言う。
「ちっ、その着物姿似合ってたのにな……じゃ、しょうがねぇ……ここは正々堂々じゃんけんだ。それでもう一度決定しよう！」
「「おー！！」」
こうして、『第二回生贄選手権』が決定されたのだった。
「じゃ、俺、グー出すから」
「え！せ、正々堂々とやるんじゃなかったの？」
「いや、これ戦略」
「……じゃ、私もグーをだすっす！」

白い棺の中に入っているのは加奈である。
「ちょっと！輝！今のは反則よ！！」
「……輝君が律儀な人とはわかったっすけどね……」
そして、もう一つの棺に入っているのは南海である。ちなみに、俺はきちんとグーを出した。他の二人はチョキを出した。
「さぁてと、じゃ、いってらっしゃい……」
「生きて帰ってきたらみてなさいよ～」
「……ああ、神様……加奈さんのほうがおいしいっす！」
「ははは、負け惜しみ的なことを言うんじゃないよ……じゃ、ばいばい」
白い棺の上に石を置いて俺はその場を後にした。とりあえず、主が現れるといわれている夕方まで待っておくとするか……
奥のほうにある巨大な岩が神とあがめられているのだろう……

お供え物はその付近に置かれているが、結構前のもののようだった。
俺は空を見上げた……と、雨粒が俺の頬を叩く。
「……師匠、これからどうすればいいんですか？」
「ほぉ、いたの気がついてたのか？少しは腕を上げたようだな」
先ほどのおじいさんが本当の姿を現した。
「ええ、まぁ……で、これから俺はどうしたらいいんですか？その前に、この村の話をしてもらいたいんですけど？他に人いませんよね？」
「……ふふっ」
師匠の顔が怖い。まぁ、もとから怖いのだからさしも変わりはないか……
「一ヶ月前ほどから姿を消しているような気がするんですけど？」
「ほぉ、そこまでわかったのか？なぜだ？」
「ええ、社のカレンダーが一ヶ月前のものでしたからね……」
「ま、確かに一ヶ月前にここの村の住民はすべて旅立った」
「え……どこにですか？」
ま、まさか……あの世に？
「世界一周の旅だ。私がプレゼントしておいた」
「……そうっすか……ところで、この村の主って……」
何ですかと聞こうとして俺は口を閉ざすことになった。それは何故か……二人の叫び声が聞こえてきたからだ。
「ま、しゃべりながら話すとするか……」
師匠は走り出した。俺も当然、その隣に並ぶようにして走る。
「……ここの村の主は龍だ。近隣の村に昔、大暴れをしていた一匹の狼がいたんだが、それを封印したのがこの村の主となったらしい。もっとも、その狼と龍が戦った後のこの場所が綺麗に平坦になったから村になったんだがな……」
そんなに大きかったのだろうか？その狼と龍は……
「それで、どうなったんです？」
「その後、村ではその龍を信仰する形になってな……まぁ、生贄

なんてしていなかった。だが、ある日……別の輩が忍び込んだそうだ……」
気がつけば師匠は俺をおんぶして跳躍。う～ん、これは見られたらちょっと恥ずかしいな……
「……私の調べによると……あいつらだ！」
あっという間に二人が捕まっているところへとやってきた。
その光景に俺は驚いた。
「……な、なんですか、あれ？」
「あれか？見ての通りだ……」
そこにいたのは黒い衣装を着ている（目だし帽にサングラス、黒いマスクに黒いロングコート）人物たちだった。加奈と南海は気絶しているのか倒れている。一人は男、もう一人は女だ。
「師匠、あの二人は大丈夫なんですかね？」
「さぁな、そんなことより……お前ら、ここに何のようだ？」
なんとなく、そう、なんとなくだが……俺は師匠がこの二人組みを知っているような気がした。
「いや、これはお久しぶりで……まぁ、いろいろと用事があるんです」
あれ？普通に知ってたぞ……なんだかシリアスな雰囲気だったんだが？これから何か非日常的なことが始まるって感じだったんだけどな……
「で、用事は済んだのか？」
男のほうがこちらに対応するのか、女のほうは男の後ろのほうにたたずんでいる。いや、付き従っているような雰囲気がある。
「ええ、まぁ……そちらの少年は？」
「私の奴隷（弟子）だ」
「あれ？師匠……何か変なのが混じってなかったですか？」
「なるほど……まぁ、既にここでの仕事は終わっていたはずなんですが……そういうあなたこそ何をしに？」
「不穏な空気を感じたからな……ま、詳しく言うならここの龍が

そろそろ起きるって感じた。もっとも、こいつがいないとどうにも出来ないからな……」
俺を見てそんなことを言う。そして、男のほうは俺のほうに視線を向ける。
「……まぁ、そこの人にはわかってるって思いますけど……実は、家出をしたいといっていた少女たちのお手伝いをさせていただいているのですよ」
「お手伝い？」
生贄って食われるってことだよな？はて、それが何故家出のお手伝いに？
「ここの神様である龍はずっと寝ています。ですから、たまにいびきをするのです……そして、いびきが聞こえた次の夜に二人の生贄を決定させる……このことを知っているのは生贄になった二人と生贄になる二人です……そこで、私たちがその二人の家に白羽の矢を立てるのです。それから……」
「？」
俺が頭の中でからまってしまった話の糸を解くのをあきらめたのを悟ったのか……相手はため息をついて呟いた。
「要するに、この生贄は家出をしたい者たちのためにあるものです」
「……ああ、そうなんですか……じゃ、今回の旅って結局意味がないようなもんでしたね？」
既に事情を師匠が知っていたのなら意味がないだろう。それなら何故、この人は俺たちをこの場所に連れてきたのだろうか？
「じゃ、そろそろお前たちは帰るんだろ？」
「ええ、そうさせていただきたいと思いますが……お手伝いをしなくてよろしいのでしょうか？」
「結構だ。私の犬（弟子）はここの程度の主に負けはしない」
「あれ？またなんだかおかしな単語が含まれていませんでした？」
「そうですか、それなら今回は見物客としてこの場にいさせてもらいますよ」

そういって男は奥にある岩をかち割った。
「うわ！なんてことを！」
「さて、お力拝見ですよ？」
岩をかち割るとすぐさまその場所を離れていつの間にか引いていたブルーシートの上にのってお茶を飲んでいる。
「じゃ、輝……私も観客席にいるからな」
「うえぇぇぇ！？」
師匠も同じようにその場所に座ってこちらを見ている。
「ええ！！な、何か武器は？」
「お前、体術があるだろ？」

ぐおおおおおおお！！

俺の目の前に現れたのは俺が三人ほど集まってできるほどの巨体の龍だった。翡翠色に輝いている。
「こ、こんな奴無理でしょ！」
「ちっ、しょうがねぇ……加奈、南海……輝を手伝ってやれ！」
「ふにゃ？」
「ありぇ？」
気絶していたはずの二人は目を覚まして俺と俺の目の前にいる龍を見る。
「「うわ、でかっ！！」」
「まぁ、そうなるだろうな……」
しかし、二人とも立ち上がって俺の隣に素直に来てくれた。
「とりあえず、素手じゃ無理だ……手が届かん！」
「何言ってるの！それなら……」
呟いた俺の腕を加奈が掴む……そして、南海も反対側の腕を掴んだ。
「こうすればいいっすよ！！」
「うえぇぇぇぇぇぇ！！」

俺を掴んで二人は投げ飛ばしたのである！！な、なんて薄情な野郎だ！

あいたた……っと、気がついてみればここは龍の頭だ。
「輝～そいつの頭をお前が叩いてやれば今日はそこで終わりだ」
そして、横には師匠が座っている。
「え？そんなのでいいんですか？」
「ああ、いずれ……私の知り合いが来てどうにかするだろ……正直、嫌いな奴だがたまには手を貸したいやつだからな……ま、お前みたいな素人が」
「……わかりました……だぁぁぁぁぁぁ！！！」
俺は雄たけびをあげながら右腕を振り下ろしたのだった。

「やれやれ、なんだかあっけなかったな……」
家に帰りついた俺は特にすることもなく寝転がっていた。既にお風呂上りで体を冷やしているつもりでもある。
「あ～きらっ！」
そんな俺のもとへ嬉しそうな声をした加奈がやってきた。顔だけ出してこちらを見ている。
「ん？どうした？」
「あの師匠って人……いい人じゃない？私に綿菓子を買ってくれたわ！」
そんなことを言って喜んでいる。そりゃ、良かったな……あれ？師匠ってお金持ってたっけ？あ、お、俺の財布が姿を消している！？ま、まさか……師匠……

龍と書いてドラゴンと呼ぶ？：日々は続く、どこまでも

七、

季節も夏になり……変わったことといえば……

「暑い……」

ということだった。それ以外に変わったことなんてない。成績は上がったり下がったりを繰り返し、加奈は相変わらずつっけんどんだし、南海は南海で未だに語尾を

「っす」のままで通している。夏休み真っ只中……

「え～今回は肝試しに行ってもらおうと思う」

美琴さんはばば抜きをしている俺たちに言った。あ、俺にばばがまわってきたようだ。

「肝試し？」

「のわぁっす！！」

よし、南海にいったな……

「ああ、そうだ」

「あ、ばば……」

「よかったっす」

「……ほら、輝の番よ」

「あ、おれあがりだわ……最後は罰ゲームだからな」

ちなみに罰ゲームは一週間の家事である。

「……むぅ、右がアウトっすかね……」

「いや、左がアウトと思うわよ？」

二人して汗かきながら心理戦を行っている。ま、俺は既に一位だから関係のない話しだ。

「お前ら、話をきちんと聞いているのかい？」

「ええ、今回はばば抜きをしようって話でしょう？楽勝ですよ♪」

ゴキン！！

どうやら、ふざけたのが間違いだったようだ……

「すいません、肝試しですね？」

美琴さんは俺を叩いたこぶしをふりながら頷く。

「来月、この近隣の学校を貸しきって行われる……意外と大きな肝試しだ」

「毎年あっている奴ですか……」

「去年は大暴れした輝の責任を私が取らなくてはいけなかったから、今年は暴れないようにしろよ？」

「わかってますって」

俺はそういって首をすくめた。

「何？輝って怖いものが駄目なの？ビビッて建物壊したの？」

なんだかニヤニヤした表情でそんなことを言ってくる加奈だったが……

「いや、輝は驚かしてもらうほうだ。昨年度はやりすぎたおどろかしのせいで新学期になっても閉鎖された教室があったぐらいだったからな……輝、お前のせいで学校七不思議が二桁にいってしまったんだぞ？」

「すいません」

「……あ、あんた何したの？」

「さぁな？俺が見つかったときは既に意識を失っていたそうだからな～」

「ま、今年も輝はおどろかす側……それで、あんたたち二人は参加者側だからな」

さて、今年も日本の恐怖の夏が……始まる。まだ、このとき俺たちは肝試しを普通に出来ると思っていたのだった。

小学校には俺以外にもおどろかす側の人間が何人か来ている。
「はい、輝君……あなたは今年はこれしか渡されていませんよ？」
手渡されたのはこんにゃくだった。
「さて、じゃ今年は釣竿で相手の顔面にこんにゃくをぶつけるだけにするか」
持参していた釣竿にこんにゃくをくっつける。
舞台となるこの小学校は四階建てであり、肝試しのルールを説明するとまず、抽選で選ばれた合計三十組のうちの一組（男女混合でもそれ以外でもいい）がはいり、学校の一つ一つを回って印鑑を押してくる。
監視カメラによってその光景は中央管理室で見物されており……そこで驚いた回数、度合いなどによって順位を決定する。一位となった参加者たちは豪華商品がもらえるらしい。そして、おどろかした側でも順位があって一位になると一応豪華商品がもらえるそうだ。去年、俺は一位になったのだが気絶していたために壇上に上がれずに病室で一位の豪華商品？（鉢植えのお花）をもらった。正直、要らなかった。
「ま、今年は一位は無理だろうからな……」
さすがにこんにゃくじゃ無理だろう。俺が陣取った場所は保健室だ。この部屋は本当に出るといわれており……俺だってこんな場所にはいたくないが困ったことにここにする以外もう場所がない。まぁ、もうそろそろ始まってしまうし、確か加奈と南海は最後のほうだといっていたな……
「……」
聞こえてくるのは自分の心臓の音ぐらいだろうか？
「……」
ひたひたひたひた……
「あれ？」
なんだか素足で廊下を歩いているようなおかしな音がこちらに向かっている気がする。参加者全員がシューズをはいているはずなの

に……まぁ、何かあったときは中央管理室にいる皆が助けに来てくれるだろう。そこには師匠と美琴さんだっているはずだ。
「……ああ、そういえば今年は監視カメラの台数が足りないっていってて一番使われない保健室はないんだったっけ？……」
ひたひたひたひたひたひたひた……
音がだんだんとこちらに近づいてきている……俺は息を凝らしてつばも飲み込まなかった。
不意に背中を叩かれた。
「！」
俺は仰天して後ろのほうを徐々に振り返ると……
「輝、どうしたの？」
「真っ青っすよ？気分が悪いんすか？」
「あれ？加奈と南海？」
そこにいたのは参加者にまわっているはずの二人だった。しかも、浴衣を着ている。
「どうしてここに？まさか心配してきてくれたのか？」
「いや、美琴さんが輝にはこんにゃくしか渡してないからお化け要因として輝のところにいってくれっていったから来たのよ！べ、別にあんたが心配になってきたわけじゃないからね！」
「まぁまぁ、加奈さん……とりあえず、私たちは脅かす側の人たちになったということっす」
しかし、二人の手には何も握られてはいないし、二人とも浴衣姿だ。
「何かおどろかすもの、持ってないのか？」
「ええ、持ってないっす……加奈さんはナチュラルにその顔で驚かせると思うっすが……」
「え！な、何でよ！私のどこが怖いのよ！」
「……私は傍観者になってしまいそうっす」
南海に噛み付いている加奈だったのだが……なるほど、この顔ならいけそうだ……

「ま、とりあえずここでこんにゃく持っててもあまり意味ないと思うんだが……」
「そうですよね～大抵の人が輝さんがいるこの保健室を無視して次のところにいってるようっすからね～それほど去年輝さんがやりすぎたってことなんすよ～」
そうなのだろうか？いかんせん、記憶がないので全然わからない。
「つまるところ、輝がこんな保健室にいても意味がないってことよ」
まぁ、加奈がいわなくてもわかっている。しかし……
「そういえばさぁ、お前たち二人がここにくるときなんだか変な音聞かなかったか？」
「さぁ？」
「知らないっすよ？」
二人して首をかしげているところを見るとそうなのだろう。実際、そうなのかもしれない……俺はこんにゃくを持って人が来るのを待った。まぁ、なんだかんだ言ってこの二人が一緒にいてくれるのだろう、これからもずっといてくれるかもしれない。

「アマヤドリ、僕が何故、お化けやくなんだろ？」
「いいだろう、人類の敵なのだからお化けだって似たようなもんだろ？」
「いや、それはちがうだろ？」
「とりあえず、お前しか適任がいなかった」
「別の世界からわざわざつれてきて……」
「いいだろ？」
「まぁ、いいといえばいいんだけど……」
「それより、この小説唐突に終わるの好きらしいな？」
「ああ、そうだよ？」
「まるで尻切れトンボだな」
「読者に妄想の翼を生やさせようとするからだよ……知ってた？」

「いや、想像の翼だろ？」
「こんな楽屋裏的な話、していいのかな？」
「いいんじゃね？」
「うわ、口調が物凄く投げやりになった」
「私はな、黙っていたが投げやりが得意中の得意なんだ。そりゃもう、ナウマン象とかいっぱつでしとめてたぐらいだからな～」
「……そうなんだ」
「ま、世界は回るさ……いずれ、また会えると思う」
「そうだね、そうに決まってるよね……」
雨ノ月　～アマヤドリ～　完

「ああ、そういえば……輝たちのこの後、どうなるんだろ？」
「さぁな？いずれまたやるんじゃね？」
「だろうね、あまりにも中途半端だからね～」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1689d/

雨ノ月 〜アマヤドリ〜

2010年10月8日15時31分発行